〈論　説〉

ギリシア人の宗教観とポリス

白石正樹

目次

一　はじめに
二　オリュンポスの神々
三　ポリスの共同祭祀
四　おわりに

一　はじめに

いわゆる神話時代の存在は、古代のギリシアにもオリエントにも共通している。しかし、ギリシアの場合、神話時代とその数世紀後の普遍宗教の時代に至るまでの間に哲学や科学の時代が介在しており、この点にギリシアらしい特徴がある。一般に神話時代の人々の信仰には、種々の物理的作用に神性を見いだす一種の自然宗教と、祖先の生霊に神性を付与する家族の宗教があったといわれる。そのうち前者は、先史時代から続いてきた自然現象や自然界の事物を崇拝するアニミズム的な宗教であった。[1] 後者は祖先を祭る氏族や家中心の祭祀で、ギリシアでは市民たちが絶やすことなくこの祭祀を継承している姿が見られた。こうした宗教的背景は、ギリシア人の間においてポリス形成期のみならず、ポリス社会の最盛期や民主制実現の時期に至るまで続いていた。また、ギリシア民族特有のオリュンポスの神々は、ギリシア精神の黎明期ともいうべき早い時期に詩人たちの創作活動を通して体系化されたもので、ギリシア人の間に広く伝播し、その後も長い間彼らの心をとらえていた。それゆえ、一般にポリスの市民たちは厚い信仰心を持っていたといえる。ギリシア文化の古典期に入ると哲学や科学が勃興するけれども、それに比例してギリシア人の間で宗教が衰弱したと考えることはできない。

ギリシア人の崇拝する神々を、本稿ではその祭祀の行われる社会基盤を考慮しつつ「家の神々」「オリュンポスの神々」および「ポリス守護の神々」に大別することにしよう。すると、その各々の特徴は、概ね次のようにいうことができよう。

まず最初に、ギリシア人の家族は共同で家の神々を祭り、祖先の血統を重んずる排他的な宗教をもっていた。各々の家には家独自の祭祀様式があり、家父長はそこでは神官としての権威を帯びていたのである。ギリシア、ローマ、

インドの古宗教に由来するこの宗教――クーランジュ『古代都市』において「家族宗教」と言われているもの[2]――は、一家族だけの守護神を祭るものである。家の守護霊はローマの場合には、次のような神々からなっている。①竈神・ヴェスタ（Vesta）。②家屋の神霊・ペナーテス（Penates）――最初は家庭を守る神であったが、家で崇拝されるすべての神々の意味もある。③祖霊神・ラーレス（Lares）――最初は土地の生産や十字路の神だったとする説もあるが、それが祖先の霊と習合して家の中で祭られたものである。④氏族の守護神・ゲニウス（Genius）――家父長の守護神、本来の氏神である。しかし、ゲニウスには各人の誕生以来の守り神の意味もある[3]。ギリシア人においても、竈の女神ヘスティアは炉端の火の霊であり、火の浄化作用により生ける炎・聖火であると共に、食物調理や身体維持、経済生活のシンボルとして具体的家族生活の中心的神であった。彼らは家の聖なる火を絶やさないようにし、年に一度だけそれを取り替えたといわれる。また、ホメーロスの叙事詩『イーリアス』においてアキレウスに殺されたヘクトールや、ソフォクレスの悲劇作品において相戦って死んだアンチゴネーの兄弟が埋葬されず、永遠の放浪者となってしまうことを恐れられたように、ギリシア人は死そのものよりも埋葬を重視したとされる。その子孫が祖先を崇拝し、神饌（供物、酒食、生贄）を絶やさないかぎり、死者は地下で生霊として、心身ともに平穏に生きると信ぜられたのである[4]。

第二に、オリュンポスの神々は、ギリシア民族の共通神ともいうべきものである。「オリュンポス」の名称の由来は、ギリシアの最高峰オリュンポス山（テッサリアにある海抜二九一七メートルの山）であり、神々はこの頂に住んでいると考えられた[5]。オリュンポスの神々の信仰が広く行なわれたのは、ホメーロスとヘシオドスの詩の伝播によるところが大きい。それは多神教の世界観であるので、ゼウスが「神々の王」であるとしても、その支配領域に関しては、海洋はポセイドーンに、地下の冥界はアイデース（ハーデース）に、天空はゼウスに属すとされ、地上とオリュンポス山はすべての神々に共通であるとされた（『イーリアス』第十五巻、一八三―二〇〇行）[6]。オリュンポス神は

歴史時代に先立つギリシア民族の精神形成そのものにかかわるものであり、かれらにギリシア人固有の神経験をもたらし、世界史の上ではたすその役割を決定づけたとさえいわれる。それはギリシア古典期のすぐれた文芸作品や建築・彫刻の背景にある宗教観でもある。「われわれはこう自問してみる必要がないであろうか。かの不滅な作品も、今のわれわれに関わりを持たぬかにみえるあのギリシアの神々がなかったならば、現にあるようなものには決してならなかったのではないだろうかと。数千年後の今日においても、見る人の心をたかめ、敬虔の念さえいだかせ得る作品を生み出した想像力、その想像力を喚び起こしたものはあの神々の精神以外のなにものでもなかったのではなかろうか[7]と」。

第三に、ギリシア人の政治社会の単位であるポリス（都市国家）について見ると、各ポリスは自己と縁の深い神々を守護神として、都市の中心部に神殿を建て盛大な祭りを挙行した（アテナイにおける守護神アテーナーのための祭典・パンアテナイア祭のように）。また、各ポリスにはゼウスや、アポローン、アルテミスなどの神々に因む祭りがあったし、季節毎に種々の穀物神の祭りを催すことも忘れなかった（エレウシスの密儀のための祭列、ディオニューソスのための悲劇の競演など[8]）。このような祭祀はそれぞれのポリス共同体の市民生活と密接に結びついていたし、一般にその都市国家の権威を高めるものであった。ポリスの政治においては、アルコンの就任や民会・評議会の開催など平時の政治活動の時にも宗教的儀式を伴うのを常としていた。市民たちは戦争のときには出陣に際して吉凶を占ったり、ポリスの守護神に戦勝を祈願した。また出征先では戦場となる地域・土地柄と縁の深い英雄（半神）の聖遺物を見つけだし、それに生贄をささげて援助を請うことも数多くあった（ヘロドトスの『歴史』の中に数々の例が出ている）。このようなポリス共同体の祭祀・儀礼の対象は、先に述べた「家の神々」や「オリュンポスの神々」と区別されて、その固有の意味で（すなわち、各ポリスの政治宗教であって、私的なオイコスの領域の宗教でも、ギリシア人一般に共通の宗教でもないものとして）「ポリス守護の神々」と呼ぶことができよう。さらに、アテナイでは伝統

的な氏族共同体の祭祀が民主革命後も存続したようであるし、自治的な政治単位であるデーモス（区）自体にも、各デーモスの由来や慣習と密接なつながりのある、デーモス毎の供犠・祭礼があったことが知られている。[9]

このように、ギリシア人の崇拝する神々は家の神々、オリュンポスの神々、ポリス守護の神々等と多様であった。そしてポリス毎に、あるいは諸々の共同体毎に、あるいは汎ギリシア的広がりをもって、実にさまざまな宗教的行事が年間を通じて活発に行われたのである。

ところで、「家の神々」については、ニーチェがギリシア人の家を神々の祭壇に見立てて、具体的で詳細な記述を残している。それは次のようなものである（かなりの長文であるが、興味深い叙述であるので、所々省略しつつ紹介しておきたい）。[10]――「ギリシアの家は、入口から端に至るまで聖所の列である。家が面している歩道を車馬の危険から保護するための石柱は、ヘルメースの柱像であり、それは公共の聖所として見なされていた。……家そのものに属するものには、戸口の側の囲壁に接して、先の尖った円錐形の柱石が置かれた。これはアポーロン・アグイエウスおよびテュロロス（戸口の守護神）の象徴であり、その祭壇である。この神は、またアレクシカコス（災難除け）、パイアーン（救済者）、アポトロパイオス（悪除け）、プロスタテリオス（戸口に立つもの）とも称呼された。すなわち、この神は、いかなる災厄も家の中には入れてはならないのである。……ひとが敷石から隣接している会堂に入ろうとするならば、ひとは男子の間の中庭に出会うであろう。ところで、この中庭の中央には、階段の上に築かれた四辺形の祭壇が設けられてある。そして、これはゼウス・ヘルケイオス（中庭の神）[11]に捧げられたものである。恐らくは、その傍らには柱像も立っていたことであろう。これは最も古い聖所の一つである。……会堂の奥の隅、すなわちミュコイも同様に聖所であった。その神々はミュキオイと称呼された（もっとも、この名前は寝室に祀られてある神々をも包括するものである）。ここには、二種類の神々が祀られてあった。すなわち、家業を守護し、家族がその生計を負うところの神々と、祖先より伝えられた氏族および家族の神々である。最初の神々はテオイ・クテシオイ（財産あ

るいは家事の神々）であり、とくにゼウス・クテシオイ（それはまたエピカルピオス［収穫をもたらし、これを守るもの］、エピドテス［良きものを与えるもの］とも称呼されるもの）である。この神の像は、二つの柄の飲用容器と同じような函（はこ）の中に保管されていた。聖式に際しては、この容器に純白の毛糸を捲きつけ、オリーブや果実と共に水を注ぎ入れた。この神を崇拝するための家の祭典は、祈りと供犠と共餐によって営まれた。ヘルメースも、またこの（神の）部類に属する。さらにアガトダイモン［宝角をもったシレノスの形姿も］……ついでテュケ・アガテ［宝角をもった女神も］……プルートスも、また恐らくはこの部類に属する。――後者の神々は、テオイ・パトロイオス、テオイ・パトリオイ（父祖の神々）であり、厳密に言えば、これは常に国家の儀礼について言われる神々である。すなわち、この概念は動揺しており、あるときには広い意味において一地方にわたって古くから祀られている神々のすべてを指し、……あるときには狭い意味で捉えられて、祖先より伝えられた家族そして氏族の神々が意味される場合もある。……父祖の神々には、アポローン・パトロイオスが属している。この神は、その公共の聖所をアテナイの市場に有していた。……アテーナーもまた家の祭祀に属していた。この女神は土地の統一を代表するものである。……パトロイオイが礼拝される場所は、とりわけて家の聖所と見なされた。それは家の神間である。……

会堂の側廊に座（ます）ます神々を観察したのちに、われわれは男子の間（家の中心部）に入り込むことになる。この男子の間の中央には、ヘスティア（炉の女神）の円形の祭壇が純白の紐で飾られて、煌（かがや）かしく人目を惹きけている。それは、主人たちが饗宴する場所において、またみずから屠殺し料理した、そういう時代におけるかつての炉である。このヘスティアは呼びかけられること最も多く、供犠を受けること最も多いのである、と言うのは、他の神への供犠もすべて、この女神に始まって行なわれるのである。火が犠牲を焼きつくすに先立って、まず火が燃やされなければならないからである。また供犠の終結も女神に捧げられたのである。……女神と共に、テオイ・エフェスティオイ（炉に捧げられてある家の神々）として、ゼウス、ヘーパイストス、ニュムペ、ポセイードンなどが、この聖所を分かち

合った。」

このような叙述から、ギリシア人の「家の神々」の様相は、ほぼ了解されうるであろう。他方「オリュンポスの神々」については、十二柱の各々の神の性質や特徴、各々の神観の形成、受容ないし伝播、またその体系化などの問題がある。本稿では宗教学や神話学に属するであろうこうした問題にあまり深入りすることはできない。しかし、ギリシア人にとってオリュンポス的なものの精神が何であったか、かれらの世界観にとって多数の神々の存在や役割はいかなるものであったか、といった事柄は検討されるべきであろう。また神々は「オリュンポス神」であれ、それ以外の神性であれ、ある特定の共同体との係わりにおいて、その共同体の人々の崇拝を受けた。それぞれの神に対してポリス共同体、氏族や部族の共同体、あるいは地域共同体の供犠式が行われたからである（「ポリス守護の神々」の祭祀はその典型である）。したがって、神々はギリシア人の間での現実味をもった宗教としては、諸共同体との関連で考察されなければならないであろう。そしてオリュンポスの神々以外では、共同体との係わりにおいて特に顕著なものは英雄崇拝であった。

われわれは以下、ギリシア人におけるオリュンポス神の形成と意義を検討することにする。その後、ポリスの共同祭祀の重要性を示す事例として、アテナイ・ポリスの統合を取り上げたい。アテナイによるアッティカ地方の統一には宗教祭祀が深くかかわっているし、ポリスの中央権威の正当化・安定化のために、ポリスの守護神の祝祭や英雄崇拝の導入は不可欠なものであったように思われるからである。

注

（1）アニミズムの理論は、E・B・タイラーの『原始文化』（一八七一年）によって確立された。この理論によると、「原始時代の人間は夢という不思議な現象だとか、死んだ肉体と生きている肉体との差異だとかについて思案した結果、ある不可視の実体〈霊〉が存在するはずだ、との結論に達した。生命はこの霊に依存しており、霊が一時的に不在となると眠りが、永

久に抜けでてしまうと死が生ずる。こうして、原始人の思考を解明するひとつの解釈原理が発見された。この原理は動物や植物の生命にも、さらにあらゆる驚異的な事物と現象とにも適用された。これらのすべてが、ひとつの霊ないしは精気をうちに持つ。したがって、人間をはるかに凌ぐものではあるが、本質的には人間に似た、人格的な存在でありえた。」（W・F・オットー『神話と宗教―古代ギリシャ宗教の精神』辻村誠三訳、筑摩書房、昭和四一年、一八―一九頁。）

（2）クーランジュ『古代都市』田辺貞之助訳、白水社、一九五〇年、第一編第四章、およまび第二編第八章参照。

（3）霜田美樹雄『キリスト教は如何にしてローマに広まったか』早稲田大学出版部、一九八〇年、五五―六〇頁参照。

（4）クーランジュは次のように述べている。――「人々は死そのものよりも寧ろ葬礼の行はれるや否やを案じた。それは永遠の安息と幸福とが葬礼の一事に係っていたからである。これを以て見れば、海上における勝利の後で、戦死した兵士達の屍骸を葬ることを怠った将軍達を、アテナイの人々が殺してしまった事実も、格別驚くに足らぬ」（前掲、五七頁）。他に、M・P・ニルソンは次のようにいう。――「ギリシア宗教の背景は、二つの普遍的な観念から形成されていることになる。一つは死者にかんする観念であって、死者は生者によって養われ敬われるもので、墓から現われて血縁者を助けまた復讐をはたすというもの。いまひとつは、あらゆるものにゆきわたっている力にかんする観念である。それは、ひとが何とか避けたいと思う危険によってひとをおびやかすが、またひとが得たいと願う恵みをもたらすこともできる」（ニルソン『ギリシア宗教史』小山宙丸他訳、創文社、一九九二年、九六頁）。

（5）Walter Burkert, *Greek Religion*, tr. by John Raffan, Harvard University Press, 1985, p. 126. Peter Levi, *Atlas of the Greek World*, Phaidon Press, Oxford, 1980, p. 14, p. 72.

（6）『ホメーロス』［イーリアス・オデュッセイア］呉茂一・高津春繁訳、筑摩書房、一九七一年、一七三頁。ところで、ローマにおいては都市の中心にヴェスタ女神を祭る円形の神殿が建てられ、処女の巫女たちが聖火に仕えていた。その場合、中心部に竈の女神を祭る都市国家には、家の集合体あるいは家の拡大したものというイメージがある。しかし、ギリシアにおいてはオリュンポスの十二神と都市国家の守護神がそれを凌駕していた。つまり、ゼウスが第一位の神になり、それにオリュンポス神がつづき、ヘスティアは下位の神に落とされた（クーランジュの他、アレント『人間の条件』に言及されている）。アテナイのパルテノン神殿のフリーズ（Frieze）において、われわれはヘスティアに代わって新参の神ディオニューソス――実は太古の神の再生――が十二神の中に入っているのを確認することが出来る（パルテノン神殿東側を飾る浅浮彫りに刻まれたオリュンポス十二神。Jan Jenkins, *The Parthenon Frieze*, British Museum Press, 1994, p. 78）。

（7）オットー、前掲、四頁。

（8）以下のものを参照。――ジェーン・E・ハリソン『古代芸術と祭式』佐々木理訳、筑摩書房、一九六四年、一九九七年。

Gilbert Murray, *Five Stages of Greek Religion*, Columbia University Press, 1925. マレー『ギリシア宗教発展の五段階』藤田健治訳、岩波書店、一九四三年、改訳一九七一年。Erika Simon, *The Festival of Attica*, Princeton University Prees, 1983.

(9) David Whitehead, *The Demes of Attica*, Princeton University Prees, 1986, ch. 7.

(10) ニーチェ『ギリシア人の祭祀』上妻精訳、ニーチェ全集1、理想社、一九八〇年。筑摩書房、一九九四年、四〇六―四一一頁（なお引用に際しては、本稿の他の部分の記述との統一を図るために、一部の神名に長音符を加えたことをお断わりしておきたい。以下、他の邦訳からの引用も同様である）。

(11) Ζεὺς Ἑρκείος = The household god, because his statue stood in the ἕρκος, Od., Hdt., etc. ἕρκος = a fence, hedge, wall, Hom.; esp. round the court-yards of houses, Od. (Liddell and Scott, *An Intermediate Greek-English Lexicon.*)

二　オリュンポスの神々

ホメーロスはキオス島生まれの盲目の詩人と伝えられるが、生きた時代も生涯もはっきりしない。しかし、ホメーロスの讃美者たちは「この詩人こそはギリシアを教育してきたのであって、人生の諸事の運営や教育のためには、彼を取り上げて学び、この詩人に従って自分の全生活をととのえて生きなければならない」[12]と信じていた。ホメーロスはたんなる詩人ではなく、神話や伝説の語り手であった。神話の形成はギリシア人にとっては社会的な意味で最高度に重要な活動であった。また、伝説にとって不可欠なテーマは、観念ではなく行動、教義ではなく出来事――戦争、洪水、陸・海・空にわたる冒険、家族の不和、出産、結婚、そして死のような事件であった。儀式や祭の折りにそうした物語に耳を傾けるとき、人々はそれをあたかもわがことのように追体験した[13]。

ギリシア人は――その祖先はキプロス文字やクレタ線文字Bを使うという二度の試みをしたようであるが――前一

〇〇〇年頃セム子音文字の系列に属するフェニキア文字と接触し、前八〇〇年から前七五〇年頃までに母音表記を加えてアルファベットを作り出した。[14] この新しい発明の成果を身につけることによって、今やギリシア人は一つの陶器の所有者名から一巻の書をなす叙事詩まで、考えうるかぎりの全ての事柄を記録することができるようになった。それまで長い間『イーリアス』や『オデュッセイア』などの英雄詩は、朗唱用の定型句をたくさん含む口誦詩であったが、前八世紀後半には書かれた叙事詩となり、今日伝わっているような形態になった。[15] この二作品は他に匹敵するもののない質の高さを誇ったから、祝祭での朗誦や写本活動がくりかえされ、後代も決して失われることはなかった。しかし、それ以外のトロイエー叙事詩圏（エピコス・キュクロス）は五、六百年もたつと散逸してしまった。

クレタ島の先住民族ミノア人は平地に開放的な宮殿を営み、その艦隊によって広くエーゲ海一帯を支配した海洋民族であった。これに対し、本土のミュケーナイ人は武器や狩猟を好み、つねに好戦的で丘の上の城砦を中心とする共同体を築いた。やがてミュケーナイ人は、ミノア人から筆記の体系を借用して自分たちの言語に合うように改変し（線文字B）、王国管理のための記帳に用いた。前十三世紀の終わり頃、線文字Bで書かれたギリシア語の粘土板文書が、ミュケーナイ文明末期のクノーソス、ピュロスをはじめ、ミュケーナイ、テーバイ等の遺跡から出土している。これらの文書の中にはすでに、他のよく分からない神名とともに、オリュンポス十二神のいずれかと同定しうる神名が多数見出される。したがって、後代にオリュンポス神を構成するものの大半はミュケーナイ文明の末期までに、移住してきたギリシア人＝ミュケーナイ人が自らギリシアの地に持ち込んだ神々、旧エーゲ海文明の先住民族から（あるいは非ギリシア系の他の移住民族から）受け継いだ神々、あるいは自ら持ち込んだ神と先住民族等の崇拝する神との融合によって生じた神々であると考えられる。[16] ここでは、J・チャドウィックの研究によって、ミュケーナイ文明の粘土板文書に残された、（のちにオリュンポス神としてまとめられるべき）神々の神名を確認しておこう。

ゼウス（Ζεύς. Zeus）。――オリュンポス神の中でも、印欧語族の分岐以前に遡るもので、ギリシア語以外の言語

にも見出される神名は、ゼウスただ一つだけである。ゼウスはDyēusと推定される祖形（プロト印欧語）から規則的に発展したギリシア語であり、この名前と結び付けられて用いられる言葉からすると、大空とその輝きの神と見なされていたことがうかがわれる。ヴェーダではこの名は「父」という語と結びついてDyaus pitar（ドヤウス・ピタル）となり、ラテン語でも全く同様にIuppiter（ユーピテル）となっている。この名前がギリシア人の祖先によってギリシアにもたらされたことは疑いの余地がない。[17] クノーソスの粘土板の一つ（オリーヴ油の奉納。Ep 1）の「デウキオスの月に」の第一項目に「ディクテーのゼウスのために」とあり、第二、第三などの項目にダイダレイオン（Daidaleion）へ、pa-de[18]へ、「あらゆる神々のために」、qe-ra-si-jaへと続いている。この「ディクテーのゼウス」という呼称は古典時代にもよく用いられたものである。ディクテーはクノーソス南東の大山岳地帯で、祭儀に用いられたいくつもの洞窟が発見されている。[19] また、ピュロスの粘土板の文書（暦月名を伴う宗教的な性格のもの。Tn 316）に、ポトニア（Potnia）、Ma-na-sa、ポシダエイア（Posidaeia）等の女神たちやヘルメースの名とともに、ゼウスとヘーラーの名が記されている。[20]

ヘーラー（Ἥρα. Hera）。――ピュロスの粘土板の文書（Tn 316）に奉納受領者としてゼウスとヘーラーの名が出ている。

ポセイドーン（Ποσειδῶν. Poseidon）。――ピュロスの神々の中で、ポセイドーンは毎年定期的に穀物貢納を受ける主要な神として、最も重要であった（Es）。その香油割当ての文書（Fr）にもポセイドーンとポトニアが登場する。またクノーソスの粘土板（V 52）の四神の中にpo-se-da（ポセイダーオーン）とある。[21]

アテーナー（Ἀθήνη［アテーネー］. Ἀθηνᾶ［そのアッティカ形］. Athena）。――クノーソスの粘土板の一つ（V 52）にa-ta-na-po-ti-ni-ja（ポトニア・アテーナー）、e-nu-wa-ri-jo（エニューアリオス＝軍神アレースの別名）、pa-ja-wo（パイアーウォーン＝アポロンの別名）、po-se-da（ポセイダーオーン）と四つの神名が並んで出ている。

ポトニア・アテーナーは、ホメーロスの語形 potni(a) Athēnaiē に近いことが指摘されている。[22]

アポローン（Ἀπόλλων. Apollo）。――クノーソスの粘土板（V 52）の四神の中に pa-ja-wo（パイアーウォーン）として現れるが、パイアーウォーン（Paiāwōn）はアポローンに比定することができる。

アルテミス（Ἄρτεμις. Artemis）。――ピュロス文書に「アルテミスのしもべ」（a-te-mi-to do-e-ro）（Es 650. 5）という文字、またテーバイ文書にアマリュントスへの羊毛の運送記録がある（アマリュントスはエウボイア島西岸の町で、古典時代にはアルテミス神殿があった）。

アプロディーテー（Ἀφροδίτη. Aphrodite）。――クノーソス文書などミュケーナイ時代の粘土板によれば、アプロディーテーは存在した痕跡すらない。

ヘルメース（Ἑρμῆς. Hermes）。――ピュロスの粘土板の文書（Tn 316）に、奉納の受領者としてヘルメース・アレイアスとある。[23]

デーメーテール（Δημήτηρ. Demeter）。――テーバイの粘土板に「ポトニアの家へ」と記された奉納記録がある。後代テーバイ近郊にポトニアイ（Potoniai. 女神たち）と呼ばれる地区が存在した。古典時代のギリシア人はポトニアイの名でデーメーテールとペルセポネーを思い浮かべた。青銅器時代全般にわたって地母神崇拝が行なわれていたことは明らかであるが、これはギリシア先住民の地母神崇拝がミュケーナイ時代にはポトニアと呼ばれ、形を変えて古典時代まで受け継がれたことを示している。[24]

ディオニューソス（Διόνυσος. Dionysos）。――ピュロス文書にディオニューソスと思われる Diwonusos という語形が二度現れる（Xa 1419, Xa 102）。

ヘーパイストス（Ἥφαιστος. Hephaistos）。――クノーソス文書に A-pa-i-ti-jo という男性名があり Hāphaistios ないし Hāphaistiōn を表わすと考えられる。

アレース（Ἄρης, Ares）。――クノーソスの粘土板（V 52）の四神の中にe-nu-wa-ri-jo（エニューアリオス＝軍神アレースの別名）として現れるほか、クノーソスの他の文書（Fp 14）にa-reの綴りが出ている。[25]

このようにミュケーナイ文明の記録文書の中で、他のよく分からない神々とともに奉納を受けていた複数の神々が、この文明が滅びてから長期間の不明の時期を経たのちに、しだいにその輝かしい姿を現わすに至る。この神々は叙事詩の中で歌われ古典期までにオリュンポス十二神として体系化されるとしても、その個々の神々の由来は少なくともポリス形成期より数百年遡るものだったのである。

イタカ島に戻ったオデュッセウスがまだ自分の正体を明さずにペーネロペイアに語る一節に、次のような箇所がある。「葡萄色なす海原のただなかに、まわりを海に洗われた、うるわしい豊かなクレーテーと呼ぶ地がある。そこには数知れぬ多くの人が住み、九十の町があり、おのおの異なる言葉を話し、入りまじっている。そこにアカイア人あり、大いなる心のエテオクレース人あり、キュドーン人あり、三つの部族のドーリス人と貴いペラスゴス人がある……」。[26] この詩句はミノア文明を築いた先住民族と徐々にその地に移動してきた人々との間に、歴史が分からず暗黒時代とされる時期の数世紀にわたって人種と文化の両面での民族混交が行なわれたことを伝えるものとされる。ギリシア系の人々が彼ら自身の一致した名称を手に入れるには千年以上の歳月を必要とした。のちに古典期のギリシア人は（東方の異民族＝バルバロイβάρβαροι に対して）自らをヘレーネス（ヘラス人 Ἕλληνες）と称し、その国をヘラスと呼ぶに至るが、ホメーロスでは「ヘラス」は単にテッサリア地方南部の一地域にすぎなかった。[27]

神的なものはそれぞれの民族にそれぞれの仕方で現われ、彼らに神的なものの形相を与え、こうしてはじめて各民族はそれぞれ然るべきものとなりえたのである。ギリシア人も彼らに固有の神経験を受け取ったにちがいない。その作品や業績が高い評価を受けているギリシア人に対して、神的なものがどのような現われ方をしたかを問うことは重要なことである。[28] オリュンポスの神々の自己開示そのものを伝える文献は残されていない。ホメーロスの叙事詩が生

まれたときには、この神々はすでに押しも押されもせぬ世界の支配者であった。この神々もかつてその絶対的支配権を闘いとらねばならなかったことは、かすかに伝説が伝えるばかりである。[29]

ゼウスはその名からして、インド・ゲルマン語族のギリシア人にもともと固有の神である。他方、アポローンのような偉大な神をはじめとする他の神々の中には、さまざまな試みにもかかわらず、その名の解明が不可能で、ギリシア以前の文化に属していたことがはっきり窺える神々もある。しかしいずれにせよ、この神々はすべて改めて新しい姿をもって出現したのである。神話が語るように、ゼウスが太古の神々を征服して世界に新たな秩序をしいたとき、新しく支配者となった神々を自分の子供あるいは血縁のものとして栄誉を分かち与えた、[30]というのはそのことを意味している。神々がギリシア人にオリュンポス神の形相で現われたときにはじめて、ギリシア人は本来の意味でのギリシア人となり、世界史の上で果たすその役割が決定されたといえる。[31]

ところで、ヘロドトスやトゥキュディデスによると、アッティカはじめギリシア本土のかなりの住民は、本来のヘラス人ではなかったという。例えばヘロドトスは、アテナイに関して次のように述べている。「なおアテナイ人は、ペラスゴイ人が現在のギリシア（ヘラス）の地を占有していた頃は彼らもペラスゴイ人で、クラナオイ人の名で呼ばれていた。[32]」また、トゥキュディデスの『戦史』では「トロイ戦争以前には」ヘラス全体を総称する名称はまったく存在せず、「個々の部族名、なかんずくペラスゴス族の名が、各々の住む土地の名称として用いられていた[33]」とされる。それゆえ、古典期のギリシア人は純粋なヘラス人ではなかった。本来のヘレーネスは威勢堂々たる特殊な征服民族であり、それが周囲の諸民族の心をひきつけ、これに倣ってその名を名乗るようにさせたのであった。ヘロドトスにとってはスパルタ人はヘラス系であったが、アテナイ人はそうではなかった。ペラスゴイはある時期までにヘラス人と変り、その言語を学んだのであった。「しかし誰の祖先も大して検討に堪えないような場合には、真のヘラス人であることを証明すべき唯一の道はヘラス人らしく行動するにあった。換言すれば真のヘラス人はかくあるべしとい

う絶えず昂まり行くある理想に近づくことであった」[34]。

エーゲ海の左右両岸に移住し定着した諸民族にとって、オリュンポスの神々は、ギルバート・マレーによれば、「私があえて厳密に宗教改革とよぼうとするものを生み出した」[35]。オリュンポス神の宗教の果たしたこのような役割は、次のような幾つかの理由によって説明される。――まず第一にホメーロスに帰されているこれらの叙事詩は、旧エーゲ海種族の母系的習俗とはきわだって違った族長的制度をもつアカイアの伝統、すなわち北方の征服民族の伝統を現すものである。第二にその詩は伝統上貴族的性格のものであり、民衆的迷信からは遠い族長たちの文学である。その源泉は宮廷の広間で歌われた歌のようなものであろうが、後世に伝承されたものはパネギュリスすなわち公けの祝祭において吟唱された詩であった。第三にその詩は主要な段階ではイオニア風（小アジア）のものであり、そしてイオニアは多くの理由から「原蒙昧」に対する前進運動を行なうに相応しい状勢にあった。最後にこのイオニアは、アテナイの興起前にあっては、たんにギリシアの最も創造力に富み英知的な部分であるばかりでなく、知識と教養において最大限度に進んだ土地であった。このうち第三の理由の中にある啓蒙的前進運動とは、イオニアの人々がほぼ同一の内的な自由をもち、古い英雄（ヘーロース）的伝統を強めることができたことを指す。すなわち、イオニア人はその家族や種族的伝統をすてて、海を渡って侵入者から逃れてきた人々の子孫である。イオニア人が小アジア沿岸に定着したとき、彼らはある程度まで奥地の蛮族によって影響されたが、しかしはるかにそれ以上に反発された。彼らは（野蛮な他のものと異った）ヘラス的なあるものを自覚するようになり、そのヘラス的なものは、迷信的で残忍または不潔と感じられたものを退けた。ホメーロスの宗教はギリシアの自己実現への第一歩であり、このような自己実現は自然の勢いとしてイオニアで起った[36]。

『イーリアス』と『オデュッセイア』には前六世紀アテナイの校訂本があって、これがその後のホメーロスの定本となった。アテナイ人は叙事詩の中でのトロイアに対する汎ギリシア的大戦争においては、哀れなほど小さな役割し

か演じなかった。それでもアテナイは、サラミス島の領有をめぐるメガラとの激しい紛争の時に、『イーリアス』の「船軍の目録「カタログ」」の一節をその主張の歴史的根拠として持ち出すことが出来た（ホメーロスはすでにギリシア人の間で広く認められた権威であった）。「……またアイアースはサラミス島から、十二隻の船を率いて来、アテナイ人の船列が陣取るところへ、連れていって控えさせた」[37]。これに対してメガラ側は、この一節をアテナイ人による意図的な挿入であるとして、改竄の非難を浴びせる以外になかった。ホメーロスの校訂本を確立する事業は、アテナイの立法者ソロン、またはペイシストラトスによって行なわれたとされている。自らも詩人であるソロンは「ホメーロスの詩の吟唱は、最初の人が語るのをやめたその箇所から次の人は語り始めねばならないというふうに、決められた順序でなされなければならない」と規定し、ホメーロスをよりよく理解されるようにした[38]。また、一般にはホメーロス校訂本はペイシストラトスに帰されている。

ホメーロスの詩はパンアテナイア祭に一定の秩序で詠唱されるようになり、こうしてアテナイは古典期の終わりまでホメーロスの影響がギリシア本土に及ぶ中心的基地となった。ペイシストラトスとその息子の僭主は有能な能力を発揮し市民たちからわずか二十分の一税を徴収したのみで、都市を美化整備し諸神殿を造営し、パンアテナイア祭、ディオニュシア祭、エレウシスの祭祀などを盛大にした[39]。他の点ではアテナイは従来通りの法を維持していたが、法に反した例外は僭主一族の誰かがつねにアルコン職にあるように仕組まれていたことである。その中の一人（ヒッピアスの息子で）祖父の名を継いだペイシストラトスは、自分がアルコンのときにアゴラに「オリュンポス十二神の祭壇」を建立し、またピュティオン神殿にアポローンの祭壇をささげた。後に民主政となりアテナイの市民たちがアゴラにあったこの祭壇を拡張した時、その上に刻まれてあった碑文を抹消してしまった。しかし、ピュティオン神殿の祭壇の方は色褪せているが、トゥキュディデスの頃でも彼の奉納の銘が読めたという[40]。

次に、体系化されたオリュンポス十二神の特徴を、主にホメーロスの名を冠して伝えられる「諸神讃歌」によって

簡潔に記しておきたい。[41]――

1、ゼウス。「神々の中最も高き位にまします、最大の神なるゼウス」は、「遠き方まで雷鳴響かせ、力強く、物事成就せしめたもう神」である（讃歌第二三番）。ゼウスは当初から移住民族ギリシア人の主神であった。彼らは他の神々を消滅させたり背景に追いやったりしてゼウスの地位を高めた。ゼウスの率いる神々の共同体は、昔のミュケーナイ的な騎士時代の諸条件の反映である。それゆえ、神々の御座は王宮の城砦（アクロポリス）としてのオリュンポスである。オリュンポスは雲をいただいた山、あるいは頂上が雲を突き抜けて空にそびえる山の姿で表象されるのである。ゼウスはそこに神々の会議を招集する。下方にも神々の町が広がるが、その中のすべての建物の上にゼウスの宮殿が光り輝いている。[42]「最も栄ある神、最大の神」ゼウスは完全な存在ではなく、全能でも全知でもなかったが、それにもかかわらず彼の力は絶大であった。また、ゼウスは自分と人界との間に独自の距離を保ち、言葉や行為で人間に直接干渉することがなく、イリス（虹の女神）、夢、噂、もしくは他の神々のうちの一人によって伝えられる口頭の伝言か、あるいは雷や鳥跡のような間接的な形の予兆をとおして介入した。[43]

2、ヘーラー。レアーから生まれたヘーラーは「並びなき美しき容姿の不死なる女王、雷霆轟かすゼウスの妹にして妻なるかの誉れ高き女神」である（讃歌第一二番）。牛の眼をもつ尊い女神ヘーラーはアルゴスの主神で、ゼウスとの「聖婚」の儀式をもち結婚の守り神とされる。

3、ポセイドーン。「大いなる神」ポセイドーンは、「大地と実りもたらさぬ海を揺する者、海の神」であり、また泉の支配者である。「御身はヘリコーンと広きアイガイとを領したもう」。「大地揺さぶる神」（地震）であるポセイドーンは、「馬馴らす者、船救う者として」二重の権能をもつ（讃歌第二二番）。ポセイドーンは元来、大地の潅漑神で、ピュロスはじめペロポネソス半島では主神格であったと考えられる。その後ゼウスに地上の支配権を譲って海神となるのであるが、泉や馬との関係など以前の大地神の面影をもとどめている。彼の領するアイガイの地名は、エウボイ

ア島（エデッサ）のほか、北ペロポネソスのアカイア地方や、小アジアのミュシア地方にも見られる。しかし、ポセイドーンの形容辞の一つアイガイオスには、何よりもアイガイの海＝エーゲ海（Αἰγαῖον）の意味がある。[44]

4、アテーナー。「城市の守護神なるパラス・アテーナー」は、戦いの業、城市攻め滅ぼすことに心寄せ、戦の途にある軍勢と、戦より帰る軍勢を護りたまう（讃歌第一一番）。「輝く眼の、智力あふれ」る、畏き処女神、トリートゲネイア（アテーナーの呼称の一つ）。この女神はゼウスの尊き御頭から、燦然と光放つ黄金造りの武具に身をかためた御姿で生まれた（讃歌第二八番）。梟の眼をした智恵の女神でもある。

5、アポローン。「遠矢射るアポローン」、「フォイボス」（輝く者）アポローン、「イエー・パイアーン」と讃えられる神。「潮に洗われた岩がちなデーロスの島で、キュントスの山に身をよせかけてレートーが、人間たちの喜びとなすべく」アポローンを産んだ。アポローンは「竪琴を奏でつつ」ピュートー（デルフォイ）にきて、雌の大蛇を殺し「ピューティオス」の呼称をえた。この神は「パルナーソスの峡谷の麓で、月桂樹の間から宣り告げる神託」の神である（讃歌第三番）。アポローン神は伝道的性格をもつ点で、他のいかなるギリシア宗教とも異なるという。ふつうギリシアの祭儀は特定の土地と結びついており、神は土地に因んだ名前をもっている。しかし、アポローン・ピューティオスとアポローン・デリオスはギリシアの至る所に見出される。これらの形容辞に出会うところがどこであろうと、それはデルフォイとデロスに発する伝道活動を証明している。[45] ところで、死すべき人間が死後に英雄の仲間入りをする場合、それがいつ死者の親族だけなく、すべての同胞市民の間に祭儀を要求しうるかは、神の権威が決定しなければならなかった。このとき人々が決定をあおいだのはアポローンであって、アポローンは英雄たちを聖別した。[46]

6、アルテミス。「黄金の矢たずさえ、獲物追う叫びをあげる女神、鹿射る女神、矢をそそぎかける畏き処女神、黄金造りの太刀帯びるアポローンのまことの姉君」。しかし、獲物に矢をそそぎかける女神アルテミスは、楽しみ尽されるや、アポローンの館へ向かって「ムーサたちとカリスたちのうるわしき輪舞」を設ける（讃歌第二七番）。

7、アプロディーテー。「キュプリス女神、黄金ゆたかなアプロディーテー」。「女神は神々の心に甘い恋への憧れをかきたて、死すべき人間の族も、空を飛びかう鳥をも、また陸と海とが育むあらゆる獣の類をも、その御心に従える。生きとし生けるものはなべて、うるわしい花冠戴くキュテーラ女神の御業に心よせる」（讃歌第五番）。アプロディーテーは海の泡から（もしくは天空の女神ディオーネーから）生まれ、ホーラーたち（季節女神）に迎えられる。

8、ヘルメース。「キューレーネーと羊多いアルカディアを統べる神、幸運もたらす御使者」であるヘルメース。この若々しい青年神は「策略に富み、奸智に長け、盗人にして牛を追う者、夢をもたらし、夜陰をうかがい、門口を見張る神」でもある。有翼のサンダルをはいたヘルメースはただ一人、冥界のハーデースへの正式の使者となり、自らは贈物することなきハーデースも、この神には少なからぬ栄誉を与えるものとされた（讃歌第四番）。

9、デーメーテール。「おごそかな女神、髪うるわしいデーメーテール」。「細やかな踝もつその娘神」ペルセポネーが、母神デーメーテールのもとを離れて草原で水仙を摘んでいると、冥王「ハーデースが、不死なる馬を駆って処女の前にあらわれ出で」無理やりに拉し去さった。母神はエレウシスの「社殿に鎮座し」「娘を思い焦れて、やつれ果てていった」。「そして女神は多くのもの育む大地の上に、人間たちにとってこの上もなく恐ろしくまた呪わしい一年をもたらした。大地は播かれた種子の一粒とて芽を出させはしなかった」。ついに、ゼウスがデーメーテールに約束し、娘神は一年の三つの季節のうち、一つの季節は闇の世界で過ごすが、残る二つの季節は母神のもとで送ってよいとの許しを与えた。デーメーテールは「肥沃な畑地から実りの芽を生い出させ」、エレウシスの領主たちに「うるわしい密儀を開示した」（讃歌第二番）。

10、ディオニューソス。「常春藤（きづた）の冠戴き、響動（どよめき）起す神ディオニューソス」。「御神は常春藤と月桂樹とを身にまとわれて、鬱蒼と木々繁る谷めぐってさまよい歩かれた。ニンフたちはその御供をして従いゆき、御神は先立ちて女神らを引きゆきたまえば、果しなく広がる森は鳴り響動（とよ）んだ」（讃歌第二六番）。ディオニューソスはテーバイの王女セ

メレーとゼウスの子とされ、雷霆にうたれて死んだセメレーの胎内から、ゼウス自身によって取り出されたとされる。葡萄酒造りの神であり、悲劇を競う祭の主神である。

11、ヘーパイストス。「技術(たくみ)により名高い」ヘーパイストス、御神は「地に住まう人間たちにみごとなる技事を教えたもうた」。「そのかみ人間は獣のごとく山中の洞穴に住まっていたが、今や、名高き工匠(たくみ)ヘーパイストスにより、もろもろの技事を学び修め、四季を通じて、己が家で安けき暮らしを営む」(讃歌第二〇番)。鍛冶の神で、アプロディーテーの夫とされる。

12、アレース。「いと力強き神」アレースは、「黄金の兜戴き、戦車駆る神」である。この神は楯をたずさえ青銅の鎧をまとい、城市を護る神であって、疲れを知らぬ無双の槍の使い手とされる。アレースは「オリュムポスの護りの胸壁」で、テミス(掟)を支える者である(讃歌第八番)。

こうして、アプロディーテー、アポローンとアルテミス、ヘルメース等の神がギリシアに入る以前にどのような姿でその崇拝者の前に現われていたにせよ、これらの神々はあらためて新しい啓示の下にその姿を現わしたといえる。それは、われわれのもつ最古の証人ホメーロスの見た姿での神々の出現であった。ギリシア的な精神態度とか生の表現とか呼ばれるものは、本来、ゼウス、アテーナー、アポローン等々、神々自身の形相に発している。ギリシア文化のすぐれた多様な諸作品も、結局は、ギリシア人に与えられた神々の啓示が放射した光である。個々の場合にどうあろうとも、すべての場合を網羅していえば、最高神ゼウスの決定がすべてを定めるということができよう。しかし、もしギリシア人が存在の驚くべき多様性から、神的なものは様々な形相をもって複数存在するということを把握しなかったならば、彼らを最も活気に満ちた精神の持ち主とすることはできなかったと思われる。ギリシア人は神的なものがどこで、どのように現われようとも、そのままにその栄光に敬意を表した。そのほうが多様な形相を唯一の本質に還元しようと努めることよりも、敬虔なことだと見なされたからである。[47] なお、ギリシア神話は、ときに市民道徳

に抵触するように思われることを神々について語ることがある。しかし、それにもかかわらず、神々は気高く清浄で、つねに尊厳にみちている。神々は立法者ではなく、輝ける規範である。そして神々が最初、立派な英雄たちに姿を現わしたこと――例えばアテーナーがアキレウスやオデュッセウスの女神であったこと――は、オリュンポスの宗教の類なき長所として、ポリスの市民たちの心に永く生き続けたのである。[48]

注

(12) Plato, *Republic*, The Loeb Classical Libraty, 2 vols., Bk. X, 606 E, pp. 462–465. 藤沢令夫訳『国家』プラトン全集11、岩波書店、一九七六年、七二二頁。
(13) M・I・フィンリー『オデュッセウスの世界』下田立行訳、岩波書店、一九九四年、三〇頁。
(14) A・ガウアー『文字の歴史』矢島・大城訳、原書房、一九八七年、一六二頁。
(15) フィンリー、前掲、四三―四七頁。
(16) ニルソン、前掲、一二四頁参照。
(17) J・チャドウィック『ミュケーナイの世界』安村典子訳、みすず書房、一九八三年、一五〇頁。
(18) 「音価」で不明の語を表示する、以下同様。
(19) チャドウィック、前掲、一七一頁。
(20) 同書、一五七頁、一六七頁。なお、ピュロスの粘土板（Tn 316、その他）に数多く出てくるポトニア（女君、女主人の意。さまざまな特定の女神を表わす語）は、サンスクリットのパトニー（patnī）と一致する印欧語起源の語である。ピュロス文書のポトニアは、派生形容詞の形では鍛冶工を形容するのに用いられており、この女神を奉ずる鍛冶工集団の存在が推定されている（同書、一六四―一六五頁）。
(21) 同書、一六七頁、一六九頁、一五六頁。
(22) 同書、一五五―一五六頁。
(23) 同書、一七四―一七五頁、一六七―一六八頁。
(24) 同書、一六三頁。
(25) 同書、一七五頁。

(26) Homer, *Odyssey*, XIX, 172-177. 『ホメーロス』[イーリアス・オデュッセイア]、四二五頁。

(27) Thucydides, *History of the Peloponnesian War*, I, 3. Loeb, 4 vols., I, pp. 6-7. トゥーキュディデース『戦史』(上・中・下) 久保正彰訳、岩波書店、一九六六—一九六七年、上、五七—五八頁。フィンリー、前掲、一六—一七頁参照。

(28) オットー、前掲、七頁。

(29) 同書、一三九—一四〇頁。

(30) ヘシオドス『神統記』八八一行以下、廣川洋一訳、岩波書店、一九八四年、一一〇—一一九頁。

(31) オットー、前掲、一七頁。

(32) Herodotus, VIII, 44. ヘロドトス『歴史』松平千秋訳、筑摩書房、一九六七年、三八〇頁。ヘロドトスは次のようにもいう。——「[リュディア王クロイソスの] 調査の結果、ラケダイモン (スパルタ) とアテナイの二国が他国に卓絶していることが判った。一方はドーリス族、他方はイオニア族の系統を引く国である。実際この両国が他にぬきんでて強大であったが、アテナイ人は古くはペラスギア民族であり、ラケダイモン人の方はヘラス (ギリシア) 民族であった。前者がかつて他へ移住したことがなかったのに対し、後者は幾度も移動を重ねた民族である。」(I. 56. 邦訳、一九頁)。「しかし今も残存するペラスギア人——例えば……[以下、三、四例、挙げられる] によって判断してよいのならば、彼らの言語は非ギリシア語であったらしい。ところでペラスギア族全般について、右のことがいえるとすれば、アッティカの住民たちは、もともとペラスギア系であったのであるから、ギリシア民族に吸収されたとき、同時にその言語も変えたことになる」(I. 57. 邦訳、二〇頁)。このアッティカに定着した「海の住民」ペラスゴイ (Πελασγοί: Pelasgians) について、トムソンは次のように論じている。——「民主的アテナイ人はペラスゴイの出であることを誇りとしていた。彼らは『土地の子供』と自称していた。ヘロドトスは彼らをギリシア化したペラスゴイと呼んでいる。彼らの初期の王の一人は婚姻の創始者ケクロプスであった。彼以前は女たちは無差別に男と一緒になり、子供たちには自分の名を取って命名した。」(ジョージ・トムソン『ギリシャ古代社会研究——先史時代のエーゲ海——』上・下、池田薫訳、岩波書店、一九五四年、上、一六七頁。また同書、一六二—一六三頁参照)。「もしアテナイ人が『ギリシア化したペラスゴイ』であったとすれば、彼らのギリシア化に手をかしたのはブータダイに違いない。彼らがギリシア語を話す系統から出ていることは、このようにして充分ありそうな事と思われるのである。」(同書、二五六頁)。

(33) Thucydides, I, 3. 邦訳・上、五七頁。

(34) マレー、前掲、六七頁。

(35) 同書、九〇頁。

(36) この種のオリュンポス的精神の典型として、マレーは「恐らく時として私たちに倦怠を感じさせて来た現象」をあげる。すなわち人間たちがケンタウロスに対して行なう闘いや、神々の巨人たちに対する戦いに関するギリシアの最盛時期の浮彫りの中に繰り返して現われる主張がそれである。我々の近代的な同情は巨人たちやケンタウロスに味方しがちである。秩序の時代が伝奇的暴力を愛するのは、ちょうど家に安住する陸(くが)の人が海上の暴風雨を好むようなものである。しかし、ギリシア人にとってはこの闘いは十分象徴的意義をもっていた。それは人間的知性や理知や優しさが、初めて激情と力の圧倒的な勢いとみえるものに対してなす闘いであり、また究極の勝利である。それは野蛮な世界に対するヘラスそのものである。こうして、オリュンポスの宗教とは、「絶大の模索する努力」であり、かかるオリュンポス的運動の三つの主要要素は、一、古い儀式の道徳的浄化、二、古い混沌の中に秩序をもたらそうとする企て、三、新しい社会的諸要求への適応、ということになる（マレー、前掲、九三―一〇一頁）。また、ニルソンも同じく次のようにいう。――「ホメーロスの詩作品は小アジア沿岸の植民市の移民たちのあいだで成立した。移民たちは先祖の墓をたずさえて来るわけにはいかなかったので、墓の祭儀をつづけることができなかった。……植民市では誰もが自分の運命の形成者だった。自己主張と合理主義を求めるギリシア人気質の傾向はここに自由な活路を得た」（ニルソン、前掲、一二七頁）。

(37) *Iliad*, II, 557–558. 邦訳、二七頁。

(38) Diogenes Laertius, I, 2, 57; I, 2, 46–48. Loeb, 2 vols. 加来彰俊訳『ギリシア哲学者列伝』、岩波書店、一九八四―一九九四年、上、五五頁。フィンリー、前掲、五七―五八頁参照。

(39) マレーはアテナイの「オリュンピエイオン」に古くから祀られた神々の複合――ゼウス・オリュンピオス、クロノスとレアー、ゲー・オリュンピア――（パウサニアスの記事）により、ペイシストラトスはエリスのオリュンピアから直後ゼウスの礼拝を輸入したと推測している。なお、オリュンピエイオン神殿の造営は前五一〇年に僭主政が倒れたのち、未完成のまま長期間放置された（前一七四年に再開されたが再び中断、ハドリアヌス帝の命により一二九年に落成）。マレー、前掲、六九頁、七二頁。Pausanias, *Description of Greek*, 1, 3, 7. Loeb, 5 vols. 飯尾都人訳『ギリシア記』、龍渓書舎、一九九一年、三六頁。馬場恵二訳『ギリシア案内記』上、岩波書店、一九九一年、八七―八八頁。W・G・フォレスト、太田秀通訳『ギリシア民主政治の出現』平凡社、一九七一年、二二五頁。

(40) Thucydides, VI, 54. 邦訳・下、八〇頁。桜井万里子『古代ギリシア社会史研究――宗教・女性・他者――』岩波書店、一九九六年、二七―二八頁。

(41) 『ホメーロスの諸神讃歌』沓掛良彦訳、平凡社、一九九〇年参照。

(42) このような説明は、ユーヘメリスティック（euhemeristic）であると思われる。ニルソン、前掲、一三六―一六七頁。ま

た、ゼウスの属性は、古い時代に知られていた王の属性から集めた形になっている。ロイド＝ジョーンズ『ゼウスの正義』眞方忠道訳、岩波書店、一九八三年、一〇頁。

(43) フィンリー、前掲、二五九―二六〇頁。ホメーロスのゼウスは、のちの「正義の擁護」と密接な関係のある三つの機能をもっている。第一、誓いの擁護（Horkios）、第二、他国人（よそびと）の守護ならびに歓待の掟の擁護（Xeinios）、第三、嘆願者の擁護（Hikesios）である（ロイド＝ジョーンズ、前掲、八頁）。cf. *Iliad*, III, 270-301; IV, 140-162; XIII, 623-627.

(44) 原随園『ギリシア史研究』第三、創元社、一九四四年、一六―二二頁。呉茂一「ポセイドーンとイオーニア人」『西洋古典学研究』Ⅵ、岩波書店、一九五八年、一―六頁。

(45) ニルソン、前掲、一九三頁。

(46) 同書、一八四頁。

(47) オットー、前掲、一二六―一二七頁。ところで、「多神教は、神々の多数存在、此岸性、具象性、人間との類似性などのために、キリスト教（あるいはユダヤ教、回教）に育まれた人々にとって、唯一存在、超越性、全能、全知、至善としての真の神に対する感覚を全く欠くように思われている。それと共に、立法者、裁き手、贖罪者に対する宗教的に真摯な畏敬の念も、また欠けているように思われている。このことは、非常に魅惑的な形相をもつギリシアのオリュンポス諸神に、まず妥当する。先の観点よりみれば、彼らは神と呼ぶにはあまりにも地上的すぎるのである。それゆえ、彼らの本質とその由来については、美学と科学的な進化論との判断に、ゆだねねばならないと人々は信じた」（同書、一七頁）。

(48) 同書、一三五―一三六頁。

三　ポリスの共同祭祀

ギリシア人の祭祀の社会的単位は様々な共同体であって、諸種の共同体はみな共同の祭祀、儀礼をもっていた。家（オイコス）、氏族（ゲノス）、フラトリア、村落、デーモス（区）、部族など皆そうである。[49] その他に特殊な宗教結社が存在したし、女性たちやメトイコイ独自の祭もあった。また隣保同盟の祭祀や汎イオニア的祭祀、さらには全ギリシア的意義をもつ神託所や競技祭典も存在した。ギリシア人の政治的共同体である「ポリス」そのもの（またはそ

の市民団）も共同の祭祀を管理し、様々な祭を主催する一つの祭祀共同体の様相を帯びていた。ポリスは下位の諸集団を包括する至高の政治集団であったが、またその形成過程において、諸地方に特有であった祭祀をポリスの中央へと運んだり、中央の祭祀を諸地方に送り出したりしていた。ポリスの政治統合は同時に祭祀の統合を含んでおり――あるいはそれを前提にしており――、ポリス的政治権威の確立とはまたその共同祭祀の成立を意味したのである。

アテナイ・ポリスの場合、アッティカ諸地方の統合はどのようにして行われたのだろうか。まず、幾人かの古代の学者たちが書いたアッティカやアテナイに関する報告・叙述に目を留めてみよう。その中には直接的または間接的に、アッティカの最も古い時代の政治と祭祀にふれたものがある。

まず、ストラボン（Strabon、前六四―二一以後）によれば、アッティカは岬状の地方で両側を海が挟み、はじめの部分は狭いが、それから先は内陸部へ向うにつれて幅広くなる。このため、古くはこの地方をアクテ（岬）やアクティケ（岬地方）[50]と呼んでいた。その綴りを少し変えて今日のアッティカ（Ἀττική. Attica）という名にしたという。この地方のほとんどの地域は、山裾をはうようにして海に沿い、狭いかわりに長さがずいぶんあってスニオン岬にまで張出している[51]。

ストラボンはつづいてアッテイカとメガラの関係について、次のような二つの話を伝えている。一つは、メガラ地方の分離伝説である。パンディオンには子供が四人あって、アイゲウス、リュコス、パラス、ニソスといった。パンディオンはその支配地域を四地区に分け、四子に与えたが、ニソス（四番目の子）はメガラ地方の割当を受けてニサイア市を建設した。四地区への分割については人によって説明が様々である。しかし、ともかくソフォクレスの記すところでは「父王はまず自分（アイゲウス）にはこの土地の長子相続分を割当てて、岬地域へ出発させることに決め」たのである。もう一つの話はより後代のことであるが、ドリス族のメガラ占領についてである。ドリス族がとりわけ神経をとがらせていたのはコリントス、メッセニア両地方の動向であった。メッセニア地方は隣接地域だったこと、

コリントス地方は当時アッティカの王コドロス（Kodros）[62]が影響力を増していたこと、がその原因だった。「アッティカ地方は亡命者たちのために人口が増えたので、ヘラクレイダイは恐れを抱いてこの地方へ遠征した。」かれらはメガラを占領し、さらにアッティカを攻撃したが、成功しなかった。

また、ストラボンはアッティカ地方に存在したという十二市（δώδεκα Πόλεις）の名を伝えている。それはアテナイ史家ピロコロスに依拠したものである。「この地方は、まず海からはカリア族に、陸からはボイオティア人……に、それぞれ侵略を受けるので、最初ケクロプスが民衆を集めて十二市を築いた。市の名はケクロピア、テトラポリス、エパクリア、デケレイア、エレウシス、アピドナ――複数でアピドナイともいう――トリコス、ブラウロン、キュテロス、スペットス、ケピシアである。」[53]そして、後にこの十二市を今日の一市へまとめたのがテーセウスだという。

ストラボンは実際には十二市（ドーデカポリス）のうち、十一市しか挙げていない。そこで、残る一市はどこか、という問題が出てくる。それは幾つかの古写本において付加されたようにパレロンであるか、あるいは――アテナイが言外に当然のこととして含意されていると解して――アテナイであるか、（あるいは何かそれら以外であるか）[54]。その際、半神ケクロプスの名と結びついたケクロピアがアテナイを指しているならば、第十二番目の市が必要であるので、パレロン（＝テトラコモイ）を加えるのがよいであろう。しかし、（ケクロピア市をアテナイ市とは別であるとして）アテナイを加えるならば数は十二で足りるが、そのかわりケクロピアの場所をアッティカのいずこかに比定する必要があろう。[55]この点、アポロドーロス（Apollodorus、一世紀頃）に従うならば、ケクロピアはアッティカ全土の呼称であるとともに、その中心市の呼称でもあると解される。なぜならば、次のようにケクロピアとアテナイのアクロポリスを密接に結び付ける神話があるからである。すなわち、ケクロプス――ゼウス・ヒュパトス（Zeus Hypatos［至高神］）を定めたアッティカの初代王[56]――は、この地を自分の名によってケクロピアと名づけたが、彼の時代に各方面の都市で神々がその特有の崇拝をうけるようになった。そして、先ずポセイドーンが、次いでアテー

ナーがケクロピア＝アッティカ――アテナイのアクロポリス――に来た。この地の争奪が両神の間に生じた時に、ケクロプスが「アテーナーが最初にオリーヴの木を植えた」と証言したので、ゼウス以下十二神の裁きによってこの地はアテーナーのものと判決された。それ以来、この市はアテーナーの名を取ってアテナイと呼ばれた。つまり、ケクロピアはアテーナーを守護神としたために、この女神の名を取ってアテナイと改称されたというのである。[57]

アッティカの十二市と比較されうるのは、小アジアのイオニアの十二市（ドーデカポリス）であろう。ヘロドトスはイオニア諸都市が同盟を作り、共通の祭祀としてパニオニア祭（Πανιωνια）を営んでいたことを伝えている。[58] ペラスゴイ系のイオニア人は、ギリシア本土のテッサリア、エウボイア、アッティカ、また北ペロポネソスのアカイアへ移住したのみならず、ギリシア本土からエーゲ海の対岸方面へも盛んに植民活動をした。とくにアテナイから小アジア沿岸に渡ってきた人々の創設した十二市は、ミュカレ岬の山にパニオニオン（全イオニア神社）を設けて共同の聖地にした。そこにはエーゲ海的な神としてのポセイドーンの神殿があった。[59] イオニアの十二市というのは、ミレトス、ミュウス、プリエネ（以上カリア地方）、エペソス、コロポン、レベドス、テオス、クラメゾナイ、ポカイア（以上リュディア）、サモス（島）、およびキオス（島）とその対岸のエリュトライである。これら十二市の人々の言葉は同一のものでなく、カリア地方、リュディア地方、サモス、キオスとそれぞれ四つの方言に分かれていた。[60]

イオニア十二市は同盟を結んでいただけで、ペルシア戦争の時期になっても統合されてはいなかった。しかし、これらの諸都市はポリスとして政治的に独立していても、同盟結成の時に共同の祭祀を設けたことに注意すべきであろう。他方、アッティカの十二市はやがて、アテナイ・ポリスの支配下に入る形で政治的に統合されていった。その統合の過程がいかなるものであったかは不明である。しかし、一つのポリスへの政治統合であるからには、それには単なる同盟関係以上に緊密な「共同の聖地、共同の祭祀」の制定という現象が伴ったであろうと想定される。

アテナイ・ポリスの形成を考察する前に、かつての十二市の各々がアッティカ地方のどのあたりに位置していたか、

そして可能な場合にはそれがどのような祭祀をもっていたか簡単に記すことにしよう。――

1、ケクロピア（Cecropia）――アクロポリスのある中心市アテナイ。ゼウス・ヒュパトスの祭祀とアテーナーの祭祀をもつ。

2、テトラポリス（Tetrapolis）――マラトン、オイノエ、トリコリントス、プロバリントスからなり、東北の海岸。テトラポリスはアポローン信仰で結ばれ、デロス島やデルフォイに独自の使節を送る習わしがあった。

3、エパクリア（Epacria）――ブラウロンより北西方向の内陸。エクパリアはプロティア、セマキダイと宗教的共同体をなし、アポローニア祭を催した。

4、デケレイア（Deceleia）――ケピソス川の最上流域で、パルネス山麓の内陸。

5、エレウシス（Eleusis）――アテナイより東方の海岸。エレウシスはデーメーテールの密儀の一大中心地であった。

6、アピドナ（Aphidna）――デケレイアより北東、マラトンより北西の方向にあたる内陸。

7、トリコス（Thoricus）――ブラウロンより南で、スニオン岬寄りの海岸、ラウリオン銀鉱への中心拠点。

8、ブラウロン（Brauron）――東側の海岸。ブラウロンはアルテミス・ブラウロニア信仰の中心地であった。

9、キュテロス（Cytherus）（＝スパタ）――ブラウロンからアテナイ方向への中間地点にあたる内陸。キュテロスはコンテイレ、エルキアとともに、トリコモイをなした。

10、スペットス（Sphettus）――ヒュメットス山の東側で、内陸。

11、ケピシア（Cephisia）（＝キファソス）――ケピソス川の中流域で、内陸。

12、パレロン（Phaleron）――アテナイに近い海岸。パレロン、キュペテ、ペイライエウス、ティマイタダイからなるテトラコモイは、ヘラクレス信仰で結ばれていた。

これらアッティカ十二市をアテナイ・ポリスへ統合したのがテーセウスだとされる。ただし、それは一人の英雄の偉業として語られているため、ポリス的統合の過程や時期についてはっきりしない点が多い。[61] ここで指摘しておきたいことは、ただ祭祀に関する次のようなことのみである。――一つのポリスへの統合とともに、「ポリスの」(Πολιεύς, Πολιάς) という形容辞をもつ神々（ゼウス・ポリエウス、アテーナー・ポリアス）の祭祀が中心的なものとなったであろうこと、ポリスの守護神アテーナーとの特別な結びつきを有するケクロプスやエリクトニオスなど神話的王――ともにゲニウス・ロキである蛇の性質をもつ――の存在が遠い過去からの伝承として（あるいは過去に投影されて）物語られたであろうこと、[62] また、ポリス創建の英雄＝半神として、テーセウスの実在が信じられ、崇拝されるようになったこと。それから、地域名に関していえば、前五〇八／七年のクレイステネスによる国制改革のとき、新しい部族――デーモス体系におけるトリッテュス名として、十二市の名称がかなりの数、使われている。[63]

今日ではアテナイ・ポリス形成の時期は、紀元前七五〇年頃と推定されている。考古学的調査でも前七八〇年と前七二〇年の間に人口の爆発（約七倍）が認められる。[64] 古典期の歴史書（トゥキュディデス、アリストテレス）は、ポリス形成を英雄＝王テーセウス（Theseus）の名と結びつけている。しかし、いわゆるテーセウスの「集住政策」(συνοικισμός) なるものは、中心市への「文字通りの、物理的な意味での人々の移住」であるよりも、むしろ中心市への「政治的、宗教的諸制度の集中化」であったと解すべきであろう。[65] こうしてアテナイ・ポリスの創建は、スパルタ型の征服によるポリス形成（階級国家）とはたしかに異質であり、あえていえば合意的ないし契約的国家形成に類似する性質をもつものと思われる。次にトゥキュディデスおよびアリストテレスの史的記述において、I「テーセウス以前とされるアテナイの変革」、II「テーセウスに帰されている変革」の部分を比較してみよう。

I・トゥキュディデス＝「土地にたいする愛着は、世のつねにも増して、古くからのアテナイ人の本性となっていた。なぜならば、ケクロプスら初期の王政時代からテーセウスの治世にいたるまで、アッティカでは、各々の小地方

ごとに執政官と評議所をもつ多くのポリス（πόλεις）にわかれて住居がいとなまれてきて、よほどの危険に脅かされない限り、中央の王のもとに集って協議することはなく、各地方それぞれ独自の政策を協議・執行する習慣をもっていた。そのために、時としては、アッティカ内でのポリスが互いに戦争をしたことさえあり、エウモルポス（Eumolpus）の率いるエレウシス人がエレクテウス（Erectheus）と戦ったなどはその一例である。」

アリストテレス＝「原始状態の最初の変革はイオーンとその仲間が一緒に定住した時で、この時はじめて四つの部族に分かれ、部族長を定めた。」

II・トゥキュディデス＝「しかしテーセウスが王位につくと、天賦の知と実力によって広く政治的秩序をアッティカ全土に及ぼし、なかんずく諸地方に割拠するポリスや会議所を廃し、一つの協議会（βουλευτήριον）、一つの評議所（πρυτανεῖον）を提唱して、各地方の政治機能を全部集約して現在のアテナイ市に統合した。王は住民たちには従来のとおり各地各村のとおりの耕作をゆるしたが、自治機関たるポリスの機能をアテナイただ一市に認めることを要求した。ここにアッティカの全住民にはアテナイ市民の義務と権利が与えられることとなって、アテナイは著しく繁栄し、テーセウス王の死後その後裔らによって受継がれたのであった。」

アリストテレス＝「第二の、すなわち以上に次ぐ最初の変革は国制の形式をもつものでテーセウスの時に行なわれ、王政から幾らか遠ざかったものであった。[66]」

二人の記述は、以上のようである。さて、I「テーセウス以前」の状態について、トゥキュディデスは、アッティカは各地方毎に多くのポリスにわかれており、各地方が独立して内部で協議をして政策を施行していたとし、地方毎の政治的（または祭祀的）共同体の存在を認めている。そしてアッティカ内でポリスが互いに戦争した事例として、エレウシスがアテナイと戦ったことをあげている。またアリストテレスは、「原始状態の最初の変革」としてイオーンとその仲間の定住をあげるが、これはアテナイ―エレウシス戦争の時であるので、トゥキュディデスが指摘する

アッティカ内での戦争の事例と重なる。この戦争は、独立していたアッティカの諸共同体がしだいにアテナイに統合される過程で起きた事件と考えることができる（一般にはエレウシスの統合はその最後のもの、とされる[67]）。トラキア人と結んだエレウシスを破り、アテナイに勝利をもたらした「イオーン」はアテナイを四部族制とし、「イオニア人」の名祖となった[68]。次に、II「テーセウスに帰されている変革」については、トゥキュディデスによれば、天賦の「知と実力」（ξυνετοὶ καὶ δυνατοί）を備えたテーセウスがアッティカ全土に向かって一つの評議会と一つの執行部の創設を唱え、それまで分立していた地方毎の共同体をアテナイへ結集した。この政治統合によってアッティカ諸地方の住民はアテナイ・ポリスの市民になった。また、アリストテレスによれば、それは「国制の形式をもつ最初の変革」であって、アテナイに「王政から幾らか遠ざかったもの」――普通にはアレイオス・パゴス会議を中心機関とする貴族政と解される[69]――を成立させたという。

このように、諸地域の相対的独立からポリス的統合にいたるトゥキュディデスとアリストテレスの史的記述は、よく重なり合っている。しかし、ここではポリス成立と英雄崇拝の関係、またポリスの祭祀と地方的祭祀の関係をさぐるために、第一に「エレウシス戦争と名祖イオーン」、そして第二に「アテナイ集住と半神テーセウス」について、もう少し伝承や史的記述を調べることにしよう。

まず第一に、イオーンについては、ヘロドトス、アリストテレス、パウサニアス等に記述がある。そのうちヘロドトスは、「アテナイ人は……クストスの子イオーンがアテナイの軍司令官（ストラタルケース）となったとき、その名にちなんでイオニア人と呼ばれることになった[70]」とし、クレイステネスの改革以前、アテナイには四つの部族があり、それらの名称は「イオーンの四子ゲレオン、アイギコレス、アルガデスおよびホプレスの名にちなんで命名されていた[71]」と簡潔に記している。イオーンは全イオニア人にとっての名祖英雄であり、また彼の四子もアテナイの旧四部族の名祖であったとされるのである。なお、エウリピデスの作品『イオーン』の結末で、アテーナー・パラスがイ

オーンをケクロプスの国の王座に就けるよう勧め、「彼から生まれた四人の子は、わが岩丘の周りに住まう国民(くにたみ)の、おのおのの土地と部族の、名祖となる筈――まず第一は、ゲレオン……して最後に、わが神楯（アイギス）に名をちなむアイギコレス」と予言する場面があり、四子中アイギコレスのみ、名の由来が明かされている。[72]

アリストテレスの『アテナイ人の国制』は、その始めの散逸した部分でイオーンと旧部族制についても論じていたらしく、その内容を伝える後世の写本の断片が幾つか伝わっている。ここでは次のような三つの断片を取り上げることにしたい。――

「ピュートーの神なる父祖のアポローン。かの神のたくさんある呼称の一つ。イオーン以来アテナイ人はアポローンを父祖の神として共同に尊崇している。アリストテレスの伝えるところによればイオーンがアッティカに住むに至ってからアテナイ人はイオニア人と呼ばれ、アポローンは彼らにより父祖の神と呼ばれたから。[73]」

「アテナイ人の軍の指揮者だったイオーンはアポローンとクストスの〈妻〉のクレウサとの間に生まれたのでアテナイ人は父祖のアポローンを崇拝する。[74]」

「昔アテナイ人全体はクレイステネスが部族の制度を定める以前には農民とデミウルゴイとに分かれていた。彼らは四つの部族を成し、各部族は三部より成り、これをパトリアとかトリッテュスと呼んだ。これらの各々は三十氏族から成り、各氏族は三十人を含み、彼らは氏族に結成されて氏族員と呼ばれた。そして彼らの〈間から〉各氏族に属する神官職の人々を抽籤により選んだ。例えばエウモルピダイやケリュケスやエテオブータダイのごときである。これはアリストテレスが『アテナイ人の国制』に述べているところで、彼は次のごとく言う。『彼らは一年の四季に倣って四つの部族に分かれ、各部族は三部に分かれ、かくて一年の月の数と等しく全体が十二部となる。これらはトリッテュスとかパトリアとか呼ばれる。各パトリアには一月の日の数に等しく三十の氏族が結合され、そして氏族は三十人より成る』と。[75]」

アリストテレスでは、イオーンはアポローンの祭祀（父祖の神アポローン）をアテナイに導入した人として記憶されており、彼自身アポローンの子であるとの伝承もある。この神の信仰はアッティカ東岸で盛んだったといわれ、テトラポリスのアポローン信仰、オイノエの神ピュートーのアポローン、プラシアイ（アポローン神殿があった）の港から、聖なる船のアポローン誕生地デロス島への出帆などが知られている。実際イオーンとアッティカ東岸との関係は深く、ストラボンによれば、彼の父クストスは「テトラポリス（Oinoe, Marathon, Probalinthos, Trikorynthosの四市より成る）を築いた」とされ、またパウサニアスによれば、彼の墓は東南海岸のポタモス（Potamos）にあったとされる[76]。また、旧部族――トリッテュス――氏族の数が、それぞれ一年の四季――一二月――三〇日とパラレルな関係に置かれたことは、大変奇妙であるし説明のつかないことであるが、しかし「アポローン神が浄めの儀式と暦制定の原型を携えて小アジアからやって来た[77]」とすると、イオーンに帰されたアポーロン祭祀の導入と部族制とはまったく無関係とも思われないのである。

さて、パウサニアス（Pausanias、二世紀頃）は、イオーンについてはポタモス区の彼の墓所に触れて「対エレウシスの戦争の時にはアテナイの軍事長官（ポレマルコス）を務めた[78]」と記しているのみであるが、エレウシス近辺の紀行文の中ではとくにこの戦争について次のように説明している。――エレウシス勢とアテナイ勢との合戦があったとき、アテナイ王のエレクテウスも戦死、エウモルポスの子のインマラドスも戦死となった。そこで双方は、「エレウシス住民は独自に秘儀入信式（テレテー）を執り行なうこととするも、他の点についてはアテナイの服属民（カテコオイ）とする」という条件で戦争を終結させた。二柱の女神の神事はエウモルポス――トラキア地方からやって来た人であったという――と、それにケレオスの娘たちが執り行なった[79]。

この戦争では両勢力の中心人物がともに倒れたとされるが、パウサニアスとアポロドーロスとでは内容が少し違っている。つまり、アポロドーロスによれば、「トラキアの大軍と共に」エレウシスに味方した「エウモルポス」自身

が討ち取られたとされているのである。また、エレクテウスの死後、アテナイの王位に就いたのは（イオーンでなく）エレクテウスの長子ケクロプス（パンディオンの父で、アイゲウスの祖父に当たる人）であったとされる。[80]

しかし、いずれにしろデーメーテールの密儀の中心地エレウシスは、その農耕祭祀の重要性や汎ギリシア的意義の故に、アテナイ・ポリスに帰属してからも守護神像とその儀礼を首都に移されなかった例外的な聖所であったと思われる。神話によればデーメーテールは、エレウシス王ケレオスとメタネイラの子（異説もある）の「トリプトレモスに有翼の龍の戦車を造ってやり、小麦を与えた。彼は空を飛んでひとの住んでいるすべての地にこれを播いた」という。後代のアテナイは、こうした伝承の汎ギリシア的性格を自国の外交政策に利用することすらできた。[81] また、アテナイとエレウシスは「聖道」（ヒエラ・ホドス）で結ばれ、大秘儀祭のときにはエレウシスからアテナイへの聖物運びやアテナイからエレウシスへの大巡礼が行われた。アテナイ市内にはオディオン近くのエンネアクルノス（九つの湧き口をもつ泉）の先に「デーメーテールとコレーの神殿」と「トリプトレモスの祭神像を安置する神殿」が建てられた。

次に、第二の論点である「英雄テーセウスとアテナイ集住」について考察しよう。テーセウスは、ヘロドトスの『歴史』においては、わずかに「テーセウスの暴虐」に言及されているのみである（第九巻七三）。しかも、それはまだ幼少であったヘレネをテーセウスが誘拐し、アッティカのアピドナイ（アピドナ）に隠したという伝説であって、トロイア伝説（パリスによるヘレネ誘惑）に先立つ事件として語られている。[82] しかし、先にも見たように、後の歴史家トゥキュディデスの『戦史』やアリストテレスの『アテナイ人の国制』になると、テーセウスは歴史上の実在人物として扱われている。後代のプルタークPlutarchos、四六頃―一二〇以後）の「テーセウス伝」においても同様である。アテナイにおける「テーセウス伝説」の創作は、その国家意識の高揚と結びついていると考えられる。テーセウスは神話批判の傾向の強い作家エウリピデスEuripides、前四八五頃―前四〇六頃）の悲劇作品『ヒッポリュト

ス』『救いを求める女たち』『ヘラクレス』等にアテナイの王として登場する。

テーセウスはその伝説からすれば、遠くミュケーナイに遡らねばならない。[83] しかし、彼の主な事業がアテナイ・ポリスの形成ということであれば、それは紀元前八世紀頃のことでなければならない。このように、テーセウスは実在の人物か否か、またその活躍はいつ頃のことか、はっきりしないことが多い。彼の英雄としての活躍はミュケーナイ時代に想定された武勇伝から、前八世紀頃のポリス形成にまで跨がっている。その伝説は当然、物語的要素が大きいと思われるが、ともかく彼はアテナイではポリス建設の英雄（ヘーロース）として祭られている。また、イオーンがアポローン神の子とされることがあったのに対し、テーセウスはポセイドーンの子とされることがあり、ポセイドーンの祭祀をもつ北ペロポネソスのカラウリア連盟（Kalauria）やテッサリアのラピタイ族、またアテナイのブータダイ家との関係が推測されている。「「テッサリアのペイリトオスの」英雄談（サガ）は、その現存する形では、恐らく第六世紀の後半より古いものではなかろう、テーセウスという人物がドリスのヘラクレスに対応するものとしてアテナイの民族主義によって作り上げられたのは丁度この頃であるから」。[84]

後代の旅行者であるパウサニアスは、アテナイの列柱館の壁画に、テーセウスが民主政（デモクラティア）ならびに市民団（デーモス）を象徴する絵と並んで描かれていることに触れ、次のように批評している。「つまりこの絵は、テーセウスがアテナイ人のために民主平等の政治体制を敷いたとでも言いたげなのだ。事ほどさように、テーセウスが国事を大衆（デーモス）に預けたとか、テーセウス以降もペイシストラトスが政変を起こして僭主になるまでアテナイは民主政でありつづけた、といった話が多くの人たちの間でまかり通っている。ほかにも真実ではない事柄が、歴史の話などついぞ聞いたことのないまま、子供のころから合唱隊や悲劇の出し物で耳にしたものが何でも信用できると思い込んでいるような大勢の人たちの間で、まことしやかに語られるものだが、テーセウスの場合もこの例に漏れない。」しかし、にもかかわらず、パウサニアスはこのような冷静な批判につづけて次のように言い、テーセウス

をアッティカ王の系譜に数え入れている。「だが、テーセウス本人からして王位にあったのだし、メネステウスの没後でも、テーセウスの一門は四代に至るまで支配者の地位にとどまっていたのである。[85]」

テーセウスについて一番豊富に語っているのは、やはりプルタークの書いた伝記であろう。ここでは主に「テーセウス伝」の中の幾つかの記述を取り上げつつ、彼に帰されているポリス建設の偉業、彼に因むアテナイの祭典を見ていくことにしよう。

テーセウスは、アイゲウスとトロイゼン王ピッテウスの娘アイトラーとの子とされている。一六歳になってトロイゼン（Troizen. ペロポネソスの東に突き出た半島にある町）を出発したテーセウスは、メガラでプロクルーステース――寝かせた旅人をベッドの長さに引き伸ばしたり、切り縮めたりして殺していた――を退治したり、マラトンで猛牛を退治したりした後[86]、アテナイに上り後継ぎのいない王アイゲウスに我が子として認められた。その後のテーセウスには、クレタ島の迷宮に住む半人半牛の怪物ミノタウロスへの人身御供を止めさせた功績が帰されている。当時アテナイからクレタ島へ九年目毎に少年少女を七人ずつ送る取り決めがあったとされるが、テーセウスは少年たちにまじってクレタへ行きミノタウルスを退治したのである。クレタへの貢船は喪を表わす黒い帆を揚げて送り出され、テーセウスが無事に帰るときには白い帆を揚げることになっていた。しかし、途中で嵐にあったために舵取が白い帆を揚げ忘れた。このためアイゲウスは絶望して岩から身を投げて死んだという。

アイゲウスが亡くなってから、テーセウスは一つの大事業を思い立った。それはそれまで散在していた人々を一つの町に呼び集め、全体の共通利益のために政治を行なうことである。彼が「有力者には王のいない政体……を予告し、自分はただ戦争の指揮と法律の擁護に当るだけで他の事柄についてはすべての人に平等の関与を認めると約束し[87]」、部族ごと氏族ごとに説いて回るや、大部分の人はそれを承服し、ある者はテーセウスの力や剛胆さを恐れたために彼に譲歩した。人々は城市（ἄστυ）のある場所に共通の集会場や評議会場を作った。こうして、テーセウスの提唱し

た中心市への集住政策により、アテナイ・ポリスが建設され、アッティカ全体が一つのポリスに統合されることになった。それとともに王政は廃止され、アテナイは一種の貴族政（会議政治）となった。[88] また、テーセウスは人々を貴族、農民、工人の三等級（εὐπατρίδαι, γεωμόροι, δημιοῦργοι）に分け、それぞれの本領を貴族（エウパトリダイ）＝名誉、農民（ゲオモロイ）＝功利、すなわち土地、耕牛、家産、そして工人（デーミウールゴス）＝多数とした。デーミウールゴスとは、共同体のために働く者、手に職を持つ者という意味である。なかでも貴族には、神事を司ること、官吏となること、法律を修めることが認められたが、他の市民と平等なものと定めた。[89]

テーセウスにはドーリア人の伝説上の祖ヘラクレスに匹敵するほど数多くの武勇伝が付け加えられている。クレタの王女アリアドネーとの悲恋におわったロマンや、アマゾン族を討ってアンティオペーを手に入れた話もある。テーセウスは晩年、エウボイアの東方沖にあるスキュロス島（Scyros）を視察中、島の横取りを恐れた王により高い岩から突き落とされて死んだとされる。[90] その後かなりの時が経って――とくにマラトンの戦いの時（前四九〇）「武器を着けたテーセウスの姿」がペルシア軍に向かって進むのを見かけてから――アテナイの人々はテーセウスを英雄（ヘーロース）として崇めるようになった。アテナイの将軍でミルティアデスの子キモン（Kimon）は、前四七五年にスキュロス島を攻めたとき、この島でテーセウスの墓を熱心に探した。キモンは「自分の船に遺骨を載せ立派に飾り立てて約四百年後に持ち帰」り、市民を喜ばせたという。アテナイにあるテーセウスの聖墓所（セーコス）はこの遺骨を祀るために造営された。[91]

さて、集住したアテナイの人々は、プルタークによれば、アッティカ暦第一月ヘカトンバイオーンの一六日に引越祭「メトイキア」（μετοικία）を催した。引越祭はやがて同じ月のアテーナーの誕生日をまつる祭典「パンアテナイア」（Πανα-θήναια）のために影が薄くなったが、後代のプルタークの頃でも行なわれていたという。[92] おそらくこの祭は、トゥキュディデスにおいて統合祭「シュノイキア」（συνοίκια）と呼ばれているものであって、テーセウスに

よる全アッティカの統合を記念する祝祭であった。[93] なお、月の名ヘカトンバイオーンは百頭の牡牛＝公共の生贄に因むが、ボエードロミオーンの月はアマゾネス（小アジアの女族）の侵入の時にテーセウスが救いに駆けつけたこと（ボエードロミア［の祭り］）に因むという。また、ピュアノプシオーンの月のオスコフォリア祭（収穫祭）には、ディオニューソスとアリアドネーを頌えて実のついた葡萄の枝（ὄσχος）を持った行列が繰り出される。それもテーセウスのクレタからの帰還と関係があるとされる（ピュアノプシオーンの七日または八日）。酒を潅ぐ儀式に列なる人々は「エレレウ　イゥーイゥー」と唱えるが、この文句の前の方は勝利を称える声、後の方は父王の死に驚愕・困惑する声であるという。[94] アテナイではプルターク当時でもピュアノプシオーンの月に「テーセウスのための大祭」を行っていた。この月に限らず他の月の八日にもテーセウスの祭があるのは、ポセイドーンの祭と同様である。[95]

ところで、トゥキュディデスの『戦史』第二巻一五の記述によれば、アテナイの政治統合はテーセウスに帰されているものの、その統合祭は本来、守護女神「アテーナーの誕生日を祝う」べきパンアテナイア祭と重ねて描かれているように見える。――「……この政治的統合を記念するためテーセウスの頃から今日にいたるまで、アテナイ人は国家の費用をさいて、女神アテーナーの祭典を催している」。[96] しかし考えてみれば、「ポリスの成立」と「ポリスの守護神の誕生」とはその政治的ないし祭祀的意義において同時的というべきであって、両方を同一の主体（テーセウス）の業に帰することに何ら矛盾はないというべきかもしれない（それは「ポリスの」と呼ばれるアテーナーの祝祭である）。アッティカ諸地方は一つのポリス、アテナイに政治統合された。今や女神アテーナー・ポリアスの祭祀は、全アッティカあげての盛大な祭典となった。

最後に、トゥキュディデスの記述によって、中心市のアクロポリス周辺に見られるアッティカの祭祀統合の様相を確認しておこう。「古い昔には現在のアクロポリスに往時のアテナイ人のポリスがあって、またその付近、とくにその南面にむかって町が建てられていた。そう考えてよい理由は、〈アテーナーをはじめ〉他の〈最古の〉神々の社は

主としてアクロポリスそのものの内側とその南面の地面に設けられているからである。オリュンポスのゼウス神殿、ピュティオン神殿、大地母神殿、リムナイのディオニューソス神殿などがこの地域にあり……、その他古い縁起に由来する神社も幾つかその周辺に立っている。また此処には、独裁者の時代に現在あるが如き体裁に整えられた、エンネアクルノスという名の泉がある。これはその昔、自然に涌出する清泉であったところから、カリロエーと名付けられ、往時の住民区域に近かったので、古人は最も重要な儀式に用いる水をここに仰いでいた。現在ですら、古来の習慣に従って、婚礼やその他の祭礼には、その水を用いることが仕来りとなっている。またアクロポリスは、古くは住地であった名残から、今日にいたるまでアテナイ人のあいだでは、ポリスと呼ばれている。[97]」

なぜ、アクロポリスとその南面に諸神殿が集っているのであろうか。トゥキュディデスはその理由として、昔アクロポリス上に城市がありその南面に町ができたことをあげている。しかし、地方的諸共同体のアテナイ・ポリスへの政治統合に伴う、様々な祭祀のアテナイ中央部への集中を示す現象と考えられる側面もあるのではないだろうか。地方共同体がアテナイに統合される毎に、（ときには祭神と祭式を中央へ運ぶという形で）その地方共同体の祭祀が中央にもたらされるという政策がとられ、アクロポリス周辺に神々を受け入れるべき諸神殿が立ち並んだのである。地方的共同体はその祭祀が国家祭祀の一部となることによって、ますますポリスと固く結び付けられる効果を生じた。ポリスの創建にこのような祭祀の移転が伴ったと想定することは、古代における政治統合の問題を考えるときの一つの視点であろう。そして、「アテーナーをはじめ、他の最古の神々の社は主としてアクロポリスそのものの内側とその南面の地面に設けられている」とされる。他の最古の神々の社として言及されているのは、ゼウス・オリュンピオス、ピュートーのアポローン、ゲー、リムナイ（沼地）のディオニューソス――海から来た神で、船を伴う系列――などの聖所である。さらに、アクロポリスの上には古い昔から、ゼウスやアテーナーやポセイドーンの祭祀、半神ケクロプスとその娘たちやエレクテウスの祭祀があった（また、かつてアクロポリスで祀られていたと想定されるヘー

パイストス＝アプロディーテー［？］、または何らかの男神＝女神の祭祀の痕跡もあった）。それに加えるに、デーメーテールとコレーの祭祀、アルテミス・ブラウロニアの祭祀のアテナイへの移入（エレウシスやブラウロンの場合、祭神の移動はなかった）、またエレウテライのディオニューソス――内陸の神で、悲劇の祭神――のアテナイへの移入（これには祭神の移動が伴った）等が行われたのである。

その中でも、エレウテライの祭祀転置の事情については、パウサニアスがよく説明していると思われる。――前六世紀末、エレウテライの人々は戦争で無理強いされて合併したのではなく、テーベ憎さからアテナイの市民権取得を熱望したのだった。エレウテライの平野部にディオニューソスの神殿が所在するが、年代の古い木彫祭神像（クソアノン）はここからアテナイ市内へ運び去られてしまっている。われわれの時代にエレウテライに現存するのは、それを真似た模刻である。そして、アテナイでは、ディオニューソスの最古の聖所は劇場に隣接している。囲壁をめぐらされた境内に二基の神殿と二体の祭神像があり、一体はエレウテライ出自のディオニューソス像である。[98]

注

(49) 「より大きな共同体でも、より小さな共同体でも、すべての儀礼は、田畑・牧場・養魚池・森林と同じく、共同体の専有の財産である。共同体は、貢租や寄附によって、その費用を賄い、建物を維持し、自分たちの内部から祭司をつかさどる人間を任命しなければならなかった。祭司をもつすべての神殿は、その収得によって自己を維持するところの完結せる全体であり、そして、このようなものとして、また完結せる勢力であった。このことは、無論、さしあたっては家そして氏族の祭司について当てはまることである。ここではパトロイオイ・テオイ［πατρῴοι θεοί. 祖父の神々の意］は重要な概念である。諸氏族が国家の結びつきのうちに入るとき、ひとは、これら諸氏族に、彼らの氏族の神への礼拝を公式に委任するのである。すなわち、ひとは氏族の神をまとめて都市の神々の群れに取り上げるとともに、家の祭祀は、国家の安全がその存在にかけられているところの国家の祭祀となるのである。そして、これによって、祭司をつかさどる氏族は、不安定な要素がつきまとう都市の住民たちの間にあって強固な中核を形づくる」（二一チェ、前掲、四一二頁）。

(50) καὶ Ἀκτήν ... καὶ Ἀκτίκην: Actē and Actiē. *The Geography of Strabo*, The Loeb Classical Library, 8 vols.,

IV, pp. 242–243.

(51) *The Geography of Strabo*, Loeb, IV, pp. 242–243. ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』I、飯尾都人訳、龍渓書舎、一九九四年、C 390/1頁

(52) CODRUS, supposedly king of Athens in the eleventh century B. C. ... The Dorians were defeated in a battle, in which Codrus was killed. Codrus was succeded by his son Medon, and the kingship remained in the family until the eighth century; in a later version, Codrus was the last king and his descendants were archons. Other sons of Codrus led the colonization of Ionia from Athens. ... *The Oxford Classical Dictionary*, 2 ed., p. 257. 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、岩波書店、一九六〇年、一九六頁参照。――コドロスの父メラントスは、テーセウスの最後の後裔テューモイテースを援助し、そのあとを継いで王となった。アッティカがペロポネソス人に攻められたとき、コドロスはデルフォイの神託に叶うため、敵陣に近づきわざと殺されることによって、アッティカを救った。彼の子メドンはこのような立派な王には何人も後継者たるに価しないとして、王制を廃し、終身のアルコンに就任したといわれる。なお、メドンの伝統的年代は1088 B. C. である。Cf. Aristotle, *Athenian Constitution*, III, 3, Loeb, p. 17. アリストテレス『アテナイ人の国制』村川堅太郎訳、岩波書店、一九七二年、一八頁。J. B. Bury & R. Meiggs, *A History of Greece*, Macmillan, (4th ed. 1975) 1985, p. 117.

(53) *The Geography of Strabo*, Loeb, IV, pp. 266–267. 邦訳、C 396/7–C 397/8頁。

(54) Thus only eleven names are given in the most important MSS., though "Phalerus" appears after "Cephisia" in some [After Κεφισιά Bk *no* and Φαληρός...]. But it seems best to assume that Strabo either actually included Athens in his list or left us to infer that he meant Athens as one of the twelve (note of H. L. Jones). *The Geography of Strabo*, IV, pp. 266–267.

(55) 例えば、ケピソス平原の北西隅クロピダイの地（Kropidai. IV, inland）は、明らかにケクロプスに属するというヴィラモーヴィッツ説がある。Wilamowitz-Moellendorff, *Aristoteles und Athen*, Weidmannsche Buchhandlung, 1893, 2 vols., II, p. 128. 原随園、前掲、六三頁参照。

(56) Pausanias, VIII, 1, 2–3. 「[ケクロプス] は、ゼウスにはじめて『至高の座に坐す』という異名を定めた。生命のあるものをいっさい供儀しないことに決め、祭壇には地元で作る菓子――アテナイでは今日でもこれを『こね菓子（ペラノイ）』と呼ぶ――を供えて焼いた」（飯尾都人訳『ギリシア記』、五〇一頁）。cf. Pausanias, I, 26, 5. 飯尾訳、同書、五二頁。馬場訳『ギリシア案内記』上、一二三頁。原随園、前掲、六三頁。Jane Harrison, *Themis: A Study of the Social Origins*

Origins of Greek Religion, Merlin Press, 1963, 1977, p. 262.

(57) アポロドーロス『ギリシア神話』III、一四—一五。高津春繁訳、岩波書店、一九五三年、一六四—一六九頁。なお、アポロドロースによれば、ケクロプスの死後、エリクトニオスがアテナイ王として、アクロポリスに「アテーナーの木像を立て、パンアテナイア祭を創設」した。そして、彼の子パンディオンが王となった時代に、ようやくアッティカにデーメーテールの密儀とディオニューソス崇拝が入ってきた。パンディオンの遺産はその子供たちによって分割され、王権をエレクテウスが、アテーナーとポセイドーン・エレクテウスの神官職をブーテースが得た。彼らは双生児であった。(先にパウサニウスが述べた、メガラのパンディオン[=アイゲウスの父]は、このパンディオンの曾孫とされる。)またこの点、トムソン、前掲、上、一一四頁、二五四頁参照。

(58) Herodotus, I, 142–148. 邦訳、五〇—五二頁。

(59) マレー、前掲、八四—八五頁参照。

(60) Herodotus, I, 142–151. 邦訳五〇—五二頁。なお、イオニア人のみでなく、小アジアのドーリア人も五市(ペンタポリス)——リンドス、イアリュソス、カミロス、コース、クニドス(以前はこれにハリカルナッソスを加えて六市=ヘクサポリスであった)——の同盟を結成し、カリアのクニドス半島に共同の「トリピオンの聖地」をもち「トリピオンのアポローン」の競技を行っていた。アイオリス人も小アジアに十二(ないし十一市)を数え、他にレスボス島に六市(ないし五市)あったという。

(61) 太田秀通『テセウス伝説の謎——ポリス国家の形成をめぐって』岩波書店、一九八二年参照。

(62) トムソン、前掲、上、二五三頁。

(63) 判明しているものだけで、九つほどある——ケピシア(I, inland?)、エパクリア(II, inland)、トリコス(V, coast)、スペットス(V, inland)、エレウシス(VIII, coast)、デケレイア(VIII, inland?)、パレロン(IX, city?)、テトラポリス(IX, coast)、アピドナ(IX, inland?)。cf. J. S. Traill, *The Political Organization of Attica*, Hesperia Supplement XIV, American School of Classical Studies at Athens, Princeton, 1975, Table I–Table X. D. E. Lewis, "Cleisthenes And Attica," *Historia* 12, 1963, pp.27–30. 他に周藤芳幸「アッティカにおける「統合」と「連続」」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』四〇、一九九四年、五一—七五頁参照。なお、祭祀に関する史料としては、前四世紀中頃のテトラポリスのマラトンの供儀暦、前四世紀後半ないし前三世紀前半のエレシウスの供儀暦の一部、前四世紀前半のトリコス区の一〇ヵ月におよぶ供儀暦、それに前四世紀前半のエルキア区のほぼ完全な供儀暦が残存する。

(64) Whitehead, *op. cit.*, p. 6 & pp. 6–7, note 14.

(65) Whitehead, *op. cit.*, p. 8. cf. C. Hignett, *A History of Athenian Constitution to the end of the fifth century B. C.*, Clarendon Press, Oxford, 1952, 1975, p. 34.

(66) Thucydides, II, 15. Loeb, I, pp. 288–289. 邦訳、上、二〇八頁。cf. J. de Romilly (éd.), Thucydide, *La Guerre de Pélopnnèse*, 6 vols., Société d'Edition Les Belles Lettres, 1953–1972, I, p. 13. 及びAristotle, *op. cit.*, p. 115. 邦訳、七三頁。

(67) 桜井万里子「アテナイのエレウシス併合について」『東京学芸大学紀要』第三部門第三〇集、一九七九年、二〇一頁。Hignett, *op. cit.*, pp. 35–36.

(68) イオーン（Ion, Ἴων）は、系譜的解釈においてヘレーン（Hellen, Ἕλλην）の子クストス（ドーロス、アイオロスの兄弟）とアテナイ王エレクテウスの娘クレウーサとの間に生まれた子とされる。高津春繁、前掲、四八—四九頁参照。なお、伝統的なギリシアの系図はおそらく虚構であると見なしてよいが、それが歴史的な意味を担っていることも考えねばならない。「ヘレンの息子たち……そのような人物は誰も存在しなかったという意味では恐らく虚構であろう。彼らはギリシア人の国民的自覚を体現している——彼らの統一の観念はヘレーネスとして、多様の観念はアイオリス人、ドリス人、イオニア人として——そしてこれは虚構ではなくして事実である」（トムソン、前掲、上、一七六頁）。

(69) 周藤芳幸、前掲、六四頁。

(70) Herodotus, VIII, 44. 邦訳、三八〇頁。

(71) Herodotus, V, 66. 邦訳、二四七頁。

(72) 『ギリシア悲劇Ⅲ』松本克己訳、筑摩書房、一九八六年、六二九頁。トムソンによれば、かつてドーリア人は三つの部族（それぞれ部族信仰をもつ）より成る連盟をなしており、それらはヒュレイス（ヘラクレスの子孫）、デュマネス（アポローン信仰）、パンフュロイ（デーメーテール崇拝）、の三部族であった。それに対し、イオニア人は四つの部族からなるが、それらの名前アイギコレイス、ホプレテス、アルガデイス、ゲレオンテスはいまだ説明がついていないという。ただし、ゲレオンテスがゼウス・ゲレオンを信仰したこと、および連盟の守護神は西ポイオティアのヘリコン山の神ポセイドーン・ヘリコニオスであったことは知られている。トムソン、前掲、八九—九一頁。他に、L・H・モルガン『古代社会』上、青山道夫訳、岩波書店、一九五八年、三〇三頁。

(73) ハルポクラティオン［紀元一、二世紀のアレクサンドリアの学者］。アリストテレス、邦訳、一一三頁。

(74) アリストパネス『鳥』一五二七への註疏。アリストテレス、邦訳、一一三—一一四頁。

(75) パトモス本のデモステネスのための辞典「氏族員」の項。アリストテレス、邦訳、一一四—一一五頁。このアリストテレ

スからの引用文の解釈として、トムソンは次のようにいう。――「各部族に三つの胞族があったということは十分信じられる。そして、氏族の分布はローマ人の場合ほど計量的ではない。しかし暦との一致（パラレル）はどういう意味だろうか。……一つの氏族に総計三〇名という問題であるが、これは暦によっては説明されない。この数字は恐らく徴募或いは祖税のために考えられた所要人員の常套的算定にもとづくものであろう。丁度アングロ＝サクソンの「百」が名目的に百家族の長を表わしていたのに似ている。この類似はグロートも挙げている。……」（トムソン、前掲、九二―九三頁。）氏族については他に、モルガン、前掲、三〇四―三〇七頁参照。

(76) *The Geography of Strabo*, Loeb, IV, pp. 208-209. 高津春繁、前掲、四八頁。Pausanias, I, 5, 31, (2). 『ギリシア記』、六五―六六頁。『ギリシア案内記』上、一四七頁。

(77) M・P・ニルソン『ギリシア宗教史』小山宙丸他訳、創文社、一九九二年、一九三頁。

(78) Pausanias, I, 31, (3). 『ギリシア案内記』上、一四七頁。

(79) Pausanias, I, 38, (3). 同書、一七四頁。

(80) アポロドーロスⅢ、一五、四―五。邦訳、一七一頁。

(81) エレウシスのアテナイへの併合とソロンの法（ゲノスの祭儀から国家祭儀への転換）について、桜井万里子『古代ギリシア社会史研究』、第二章、五三―五五頁、九九頁。また、トリプトレモスによる農耕伝播のテーゼとアテナイにおけるスポンダイ（神聖休戦）制度の制定について、同書、第一章、四〇―四二頁参照。

(82) Herodotus, IX, 73. 邦訳、四二九頁、及び訳註(5)。

(83) およそ紀元前一三世紀頃の人ということである。cf. Bury & Meiggs, *op. cit.*, pp. 116-117.

(84) トムソン、前掲、上、二五五―二五七頁。また、同書、一一四頁参照（ブータダイの祖ブーテースも、ポセイドーンの子とされることがある）。同じく、原随園、前掲、七〇頁。――テーセウスの信仰がアテナイで盛んになったのは、ペルシア戦役以後、すなわち前五世紀以後の現象である。「テーセウス物語。これはヘーラクレース物語のアテナイ版である。ドーリス族がヘーラクレースを自分のものにして、様々な話を彼に集中したのに対抗して、テーセウスを中心とした物語を発達させたものらしく、両者の間には類似点が多い」（高津春繁『ギリシア神話』、岩波書店、一九六五年、一二五頁。）

(85) Pausanias, I, 3. 『ギリシア案内記』上、三四頁。なお、メネステウスは『イーリアス』第二巻「船軍のカタログ」の章に出ているアテナイの英雄で、エレクテウスの孫にあたるペテオースの子。

(86) このエピソードから、テーセウスは元来マラトンの地方的英雄にすぎなかったとする見解もある。Plutarch, *The Parallel Lives*, Loeb, 11 vols. 『プルターク英雄伝』河野与一訳、岩波書店、全一二冊、一九五二―一九五六年、「テーセ

ウス伝」一四。原随園、前掲、八〇—八四頁参照。

(87) 「テーセウス伝」二四、邦訳、四〇頁。

(88) テーセウスをこのように前八世紀頃の貴族政ポリスの成立と結びつけるのではなく、遠くミケーネ時代の英雄と見なした場合には、彼もその子孫もアッティカ王にとどまり、その後も王政は最後の王コドロスまで続く。そして貴族政への移行はコドロスの子メドンないしメドンの後継者アカストスの時にアルコン制が導入されてから（アリストテレス、前掲、第三章参照）ということになる。この点、周藤氏の次のような見解参照。——「アッティカの統合の時期をめぐっては、これをミケーネ時代に溯らせる説、前八世紀頃に行われたエレウシスの併合まで統合は実現されなかったとする説、ミケーネ時代に行われた統合が前八世紀に再び繰り返されたとする再統合説が、ほぼ並立する状況にあると言って良いであろう。」しかし、これらの説について重要なのは、一つの事実をめぐる年代観の相違というより、むしろ「統合の意味内容をめぐる相違」であることである。そして、「統合の国制的な側面を重視する限り、アッティカの統合は何よりも地方貴族の集住によるアレイオス・パゴス評議会の創設を契機とする貴族政の成立と同一視すべきであり、その意味での統合をミケーネ時代にまで溯らせることは明らかにアナクロニズムであろう」（周藤芳幸、前掲、六七—六八頁）。

(89) 「テーセウス伝」二五、邦訳、四一頁。

(90) アリストテレス『アテナイ人の国制』初めの散逸した部分の断片＝エウリピデス『ヒッポリュトス』に対する註疏。プルターク「テーセウス伝」三五、邦訳、五四頁。

(91) こうしたテーセウス崇拝はペルシア戦役後に出されたデルフォイの神託にもとづくものである。プルターク「キモン伝」八。Pausanias, I, 17, (4). 『ギリシア案内記』上、八三頁。桜井万里子、前掲、「雅量の人・キモン」、三七六頁。

(92) なお、プルタークは、テーセウスが「共通な祭パンアテナイア祭」を創始したかの如くに記している（Plutarch, Loeb, I, pp. 52–53. 「テーセウス伝」二四）。

(93) *καὶ ξυνοίκια ἐξ ἐκείνου Ἀθηναῖοι ἔτι καὶ νῦν τῇ θεῷ ἑορτὴν δημοτελῆ ποιοῦσιν.* (Thucydides, II, 15, 2.) Loeb, I, pp. 288–289. Romilly (éd.), Thucydide, *op. cit.*, p. 14. 統合祭シュノイキアは、おそらくプルタークにおけるメトイキアと同一の祭とされる。cf. G. R. Stanton, *Athenian Politics c. 800–500 B. C.: A Sourcebook*, Routledge, 1990, pp. 13–16. Hignett, *op. cit.*, *p. 34.*, *n. 3.* また、統合祭シュノイキアは、パンアテナイア祭の少し前に行われた、あるいはその宵祭だったとされる。cf. A. W. Gomme, *A Historical Commentary on Thucydides*, 5 vols., Oxford, 1945, II, p. 49. 『戦史』上、二〇八頁、訳註。他に、Simon, *op. cit.*, p. 50.（シュノイキア祭とアフロディシア祭の関係を論じている。）

(94)「テーセウス伝」二二—二三、邦訳、三八—三九頁。

(95) 八は偶数の立方の最初、また最初の正方数の二倍で、アスファリオス（安定させる者）、ガイエーオコス（土地を保つ者）と呼ばれる、この神の力の安固不動を象徴している（「テーセウス伝」三六）。毎月八日はテーセウスとポセイドーンにとっては神聖な日であった（トムソン、前掲、上、三四五頁、註七二）。テーセウスの出自アイゲイダイは、アイクス（αἶξ. 山羊）、アイゲス（αἰγές. 波）に由来する名称で、またポセイドーンの呼称の一つアイガイオン（αἰγαίων.）とも関係する。父王アイゲウスの投身や彼自身の死は、白き石灰岩の断崖（スキロン）で行なわれた海神ポセイドーンへの供儀式を連想させる。原随園、前掲、一四—一六頁、五二—五八頁参照。

(96) Thucydides, II, 15. Loeb, 1, p. 289. 邦訳、上、二〇八頁。「アテナイにおいて、ひとは、テーセウスによって成就されたと言われる真の意味の共同居住を記念して、シュノイキア祭を祝っている。ところでテーセウスはポリスの炉を定礎したのである。そして、これによってアテナイは、この地域にあって唯一の真の都市となったのである。したがって、これは、ほかのアッティカ人がこのときアテナイに移った、ということによるのではない。彼らは、彼らが定住した場所に住みついたままである。しかし、つぎの瞬間——これこそ注目すべきこと！——アテナイは統治の中心地となり、ここから他のすべてのアッティカの地域は支配されることになったのである。かのシュノイキスモス［聚落統合］とは若干相違するこの国家的統合は、その祝祭をパンアテナイア祭のうちに見いだしている。この名称は、パンボイオティア祭、パンイオニア祭、パンアイトルリア祭、パンヘレニア祭に相応するものである。あらゆるアッティカ人がアテナイ人であった、ということは、まさに全アッティカを包括する国家を特色づけるものであった。——国家の建設、すなわち隣接するデーモスが共通の儀礼に統合するということは、このような国家の内部において都市を建設するということより、しばしばはるかに古いのである」（ニーチェ、前掲、四一三—四一四頁）。

(97) Thucydides, II, 15. 邦訳、上、二〇八—二〇九頁（＜＞内の補遺は、Gomme, *op. cit.*, II, p. 50. によっている。なお、訳文の一部を変更した）。cf. Romilly (éd.), Thucydide, *op. cit.*, p. 14.

(98) Pausanias, I, 38, (8), & I, 20, (3). 『ギリシア案内記』上、一七六頁、および九三頁。「……これに関して注目するに価するのは、メガロポリスの建設である。テバイの策動によって、アルカディア地方の個々の都市の市民が決議して、聚落統合し、メガロポリスに住むに至ったとき、大部分の都市はメガロポリスに自分たちの父祖よりの神々の神殿とサクラ［祭式］とを設け、その神像を移した。これによって、メガロポリスにはアルカディア地方のほとんど全部の聖所が、元のものを摸して造られるに至り、これによって元の儀礼場所のことごとくが支社となってしまったのである」（ニーチェ、前掲、四二五—四二六頁）。

四　おわりに

ギリシア人は事物の根柢に、人間の幸・不幸にかかわりなく、神的なもの、美しきもの、永遠に喜ばしきものを探し求めた。彼らはそれを見出したが、そのとき問題であったのは願望でも意志でもなく、事物の存在についての生きた知であった。それゆえにこそ、ギリシア人に対して――しかも古代世界においてただギリシア人にのみ――オリュンポスの神々が現われたのである。移住民の子孫である彼らは暗黒の幾世紀かをくぐりぬけて、エーゲ海世界の主役として登場した。ギリシア人に特徴的なのは、世界のなかに神々が住まうというよりもむしろ、世界そのものである神々によって万物が満たされているという洞察であった。こうした宗教的世界観にたてば、およそ本質的で真実なものは神の形相を開示するということになる。ギリシア人がその知性によって存在の数多い宝庫に視線を投ずることができたのは、ひとえに彼らの神々の形相によっている。[99]

しかし、ギリシア人の宗教については、ブルクハルトが指摘する次のような疑問を提出しうるであろう。オリュンポスの神々が、ギリシア人のような理屈をこねることの好きな民族のもとで、あのように長く、かつ強力に自己の地位を保ちえたのはどうしてなのか。ブルクハルト自身が仮に与えている答は次のようなものである。――この宗教の偉大な力は明らかに、生活の中の客観的勢力であり習俗でもあったその祭祀の性質と大量性にあった。この祭祀はしだいにほとんどすべての生活の喜びをその行事に結びつけるようになったが、しかし同時にその神聖な業務はポリスの管轄するところとなった。こうなるともう祭祀は革新に対して不死身となった。何事も信じなかった人々でさえ、国難があるとそれを神事をゆるがせにしたせいにする民衆の盲信を恐れることになった。しかし、宗教的な事柄の堅固な基盤を形作っていたのは、公的祭祀の発生的基礎であり、またその新しい源泉でもある家の祭祀であった。これ

はギリシア古典期の終りに至るまで、豊かな力を保ちながら生き続けていた。最後に、ギリシア人は教義的宗教を持っていたならば、すでに早い時期からそれと争いを始めていたであろう（彼らの宗教はもっぱら祭事だけであって、何ら教義的でなかった）。ポリスの行き過ぎた民主政治でさえ、その宗教と衝突することはなかったし、まして両者が教育上の問題で争い合うことはなかったのである。[100]

さて、ポリスの守護神（ホ・ポリエウス、ヘー・ポリアス）について考えてみると、それはポリスの擬人化または投影という様相をも帯びている。アテナイではアテーナーやゼウスがこうした存在であるが、考え方としては都市に名を与えたヒロイン（テーベー）や都市名を有している英雄（アルゴスやコリントス）と同じ範疇にはいる。それゆえ、ポリス共同体の礼拝は狭隘なものであった。しかしそれをむやみに広くすることは、その生命を枯渇させることであった。それに、アテナイのような由緒あるポリスでさえ、アッティカ地方全体の忠誠に訴えうるような神々をもつことはしばしば困難であった。本来アテナイのアクロポリスの丘の上には、アテーナーとそれに相応する何らかのクーロス（土地の潅漑神）があったと考えられる。やがてアッティカの諸地方がアテナイの指導下に入ったとき、アッティカの地方的な神々がアクロポリスとその周辺に集まりはじめた。その例として、オイノエからはアポローン、ブラウロンからはアルテミス、エレウテライからはディオニューソス、エレウシスからはデーメーテール、そしておそらくマラトンまたはトロイゼンからは半神テーセウス[101]――こうした神々はすべてアテーナーの巌であるアクロポリスとその周辺に公の聖所を与えられた。他方、アテナイからはプラシアイ（アッティカ東岸）やスニオン岬[102]をはじめ、諸植民地の新しい神殿へとアテーナーが送られた。ポリスの政治と結びついたこのような宗教的発展は一歩一歩と進んだのであって、叙事詩の伝播により民族的な神々の体系を一度に受容するのとは全く違っていた。[103]

ポリスの政治的統一の根本前提は、祭祀の統合である。ポリスの守護神の儀礼は氏族の儀礼に優越し、それにもとづいてあらゆる氏族は統合される。民主改革後にあっても、ポリスの守護神の儀礼はあらゆるデーモス（区）の儀礼

に優越している。小さい諸々の中心すべてを結合する仕方はこのようなものであって、ポリスの祭祀の役割は、個々の家族共同体におけるヘスティアの役割に似ている。したがって、宗教的共同性のこの中心を放棄する側は、また政治的結合をも放棄することになる。地方の独立した共同体が自らをデーモスとして、ポリスに自発的に結合するときには、自らのもつ守護神像とその祭式を中心市に移さざるを得ない。これによってその共同体は自らの独立を放棄することになる。また、結合が外からの強制による場合にも、同じことが行なわれる。敵対的な闘争によって敗北した共同体の守護神像は、勝利者の聖所のうちに移し置かれるのである。[104] ポリスはその神々を祀る公的祝祭によって威信を高めるのであり、ポリスの政治的権威の正当性はしばしばその宗教の神聖性と重なったイメージで捉えられる。アテナイに見られたのはスパルタのような輝かしい征服型のポリスでなく、共同防衛を意図した集住型のポリス創設であったが、それとて神々の恵みを受けた英雄の偉業――大きな行為と大きな言葉――に他ならないとされた。そうしたアテナイであってみれば、その数多くの盛大な祝祭は市民たちの気持をたえずポリスとその守護神へと惹き付け、ポリスを仮にも地域的、氏族的差異を超えた聖なる次元におく催しであったことだろう。

ホメーロスの叙事詩のなかでは、英雄たち自身が供犠を行ない、その熟達ぶりを示している。そのように、ギリシア人の神事はたぶん家の竈から始まったのであり、家父長の手で規則正しく行なわれたと思われる。彼らはのちに神の祭壇や神殿が共通のものとしてできたときでも、神官をどうしようかと当惑することがなかった。なぜなら、ギリシア人は誰でも生まれたときから聖域を管理したり、管理するのを見たりすることに慣れていたからである。[105] 神官たちは各々の神殿において供物を受領し、信者たちの願い事や全住民の願い事を神々に取り次ぐよう委任されるが、ポリスの市民以外のものではない。彼らにはポリスの聖職者階層を形成するなどという気持はなく、互いに連繋を持つ必要もなかった。ましてや、全ギリシア的な職階制の成立ということになると、ポリスの性質からして考えられないことだった。[106] たしかにオリュンポス神はギリシア民族の共同の所産であり、大きな競技祭典や大きな神託所はこの意

識を堅持していた。しかし、ポリスが汎ギリシア的思考のはるか上方にそびえ立っていたように、神々も個々のポリスの守護者として最大級の、真剣な崇拝を受けていたのである。

注

(99) オットー、前掲、一〇五頁、一二三―一二四頁。

(100) J・ブルクハルト『ギリシア文化史』新井靖一訳、筑摩書房、一九九二年、第二巻第三章第二節、一八一―一八二頁。

(101) マレーは他に、アテーナーと結合神格を形づくったパレネーの雷電の処女パラスを挙げる。ただし、パラスについては不明な点が多い。マレー、前掲、一〇六頁。cf. Harrison, *Themis*, pp. 87-92.

(102) 岬の上には「スニオンに座すアテーナー」の神殿がある。Pausanias, 1, 1, 1. 『ギリシア記』三頁。

(103) マレー、前掲、一〇五―一〇七頁。

(104) ニーチェ、前掲、四一五―四二八頁。なおヘロドトスは、アテナイのアイギナに対する敵意の起源として次のように経緯を伝えている。――穀物の不作に悩むエピダウロスはデルフォイの神託を伺って、ダミア、アウクセーシア二女神の神像を奉安することになった「ダミア、アウクセーシアはトロイゼンに来て群衆に殺されたクレタ島の娘たちで、デーメーテール、ペルセポネーと同視され祭られた」。二女神の神像はエピダウロスが、「アテーナー・ポリアスとエレクテウスに」毎年犠牲を供えるという条件で伐採を許されたアテナイのオリーブ樹で造られていた。かくてエピダウロスでは五穀が実ったのであるが、その後、アイギナが制海権を利してエピダウロスの領土を荒らし、ダミア、アウクセーシア二女神の神像を奪いとってしまった。アイギナはこの二女神像を自国の中央部に据えて祀り、アテナイからの神像の返還要求に応じなかった。Herodotus, V, 82-86. 邦訳、二五一―二五二頁。

(105) ブルクハルト、前掲、一八三―一八四頁。「純然たるギリシア的時代には、神官と言えば、一つの特定の神殿、一柱の神の神官だけであり、またどの神殿にも一人の神官、一人の巫女しかいなかった。ここが、エジプトやオリエントの聖域にあのような神官群がいるのと大きく異なっているところである。神殿とその財産の管理のために、また祝祭の世話のためには官吏が、外部的職務のためには、助手、供犠掛り、神殿番人等々が十分に雇われていた。しかし、ギリシア人において決して存在しなかったものは、そのものずばりの神官であって、そういう存在はギリシア民族にとってはまったく理解できないものであったであろう。どの神官もただ自分の神殿のことだけしかやらず、宗教の全体に対しては責任を持つこともなければ、また何らかの行為を行なう資格も与えられていなかった」(同書、一八七頁)。

(106) 同書、一八八―一八九頁。